

奈良学園大学  
ティーチングポートフォリオ  
(保健医療学部看護学科)

令和7（2025）年度



## 目 次

保健医療学部 看護学科	氏名	掲載ページ
教授、副学長、学部長	服部 律子	2
教授、研究科長	上野 栄一	8
教授、学科長	岩本 淳子	11
特任教授	阪元 勇輝	14
特任教授	西菌 貞子	16
准教授	小池 伝一	18
准教授	小林 由里	19
准教授	蓮池 光人	23
准教授	宮本 雅子	25
講師	井上 葉子	27
講師	高橋 晶	33
講師	高橋 寿奈	34
講師	西出 順子	39
講師	山本 真樹子	42
助教	松浦 尚子	44
助教	溝口 みちる	45
助教	村川 園美	47
助教	浅野 千晶	49
助教	趙 聖櫻	50
助教	森本 早紀	51

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	服部 律子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 保健医療学部看護学科における教育 母性看護学及び助産学領域における教育計画の立案や教育内容のマネジメント、実習施設との教育内容や指導方法に関する調整。 (担当科目)母性看護学概論、母性看護学援助論、母性看護学実習、リプロダクティブヘルス学、助産学概論、助産診断・技術学Ⅱ、助産管理論、助産学実習Ⅰ～Ⅳ</p> <p>2. 大学院看護学研究科における教育 育成看護学分野の科目を担当し、主指導教員として修士論文指導。 (担当科目)育成看護学特論Ⅱ、育成看護学特論Ⅲ、育成看護学特論演習、特別研究</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>学生が学びにやりがいを感じ、自分自身の成長に喜びを感じ、学ぶことを“楽しい”と思えるようになること、看護者になることを喜びの感情と共に行きいきと描けるようになることを目指している。 そのために重視しているのが以下の点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 自ら取り組む姿勢を育む</li> <li>2) 心が折れるような体験を乗り越える体験</li> <li>3) 自分でもやればできるんだと実感できること</li> <li>4) 学んだことを使う機会をつくり、今までできなかったことをできるようになったことを実感できるような体験ができるようにする。</li> </ol> <p>これらを実現するために、学生の学習段階に応じた仕組みをつくること、指導するのではなく方向性を示しながら学びを支えること、適切な学びの機会や教材を提供することが教員の役割だと考えている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>学生が主体的に参加する授業づくりを目指している。学生の発言を否定せず、発問を心がけ、思考を促すような関わりを心がけている。具体的な方法や関わり方については、担当科目の中から2科目を取り上げて説明する。</p> <p>1) 母性看護学概論 この授業では、グループワークの活性化を目指して毎回の座席をくじ引きで決定し、アイスブレイクを取り入れながら、色々な学生と関わり、友達以外ともディスカッションできる態度の育成も考慮した授業展開をしている。また、配布用シラバスで全ての課題とそのルーブリックを初回の授業で示し、自ら計画して取り組めるようにしている。 さらに、学生の苦手な生理学的な内容を扱う場合には各自が1つを担当してグループワークを行うジグソー法を導入し、授業を聞いて暗記するという行動にならないよう工夫している。 評価の配点も、筆記試験以外の評価方法に40%分を配分するなど、暗記だけでなく思考を促す工夫をしている。</p> <p>2) 母性看護学援助論 この科目は看護の方法を学ぶ科目である。このような方法を学ぶ科目では「知識を使うイメージ」で学べるよう、最初に看護の場면을提示し、必要な看護やその根拠を学ぶような展開にしている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>前期の母性看護学概論では、授業評価アンケートで「充実していた」が58%、「やや充実していた」を合わせると100%が充実していたという結果になっていた。また取り組みについても「積極的だった」が54%、「やや積極的だった」を合わせると「積極的」な取り組みができた学生が100%となっており、学生自身が積極的に取り組み、充実感を得ていたことが確認でき、概ね学生のニーズにあった授業ができていたと考えられた。 自由記述のよかったと思う点、充実していたと感じた点には、グループワークで学んだことで価値観や視野の広</p>			

がった、理解度が向上したというコメントが回答者の約1割からあり、この点でも概ね成果が得られたと思われる。

今後の授業(教育活動)の課題としては、グループ構成によって理解度の差が生じる点をどう補うかという点が挙げられる。各回での理解度の違いをどうフォローするか、またフォローする機会をどのように設けるかについて検討していきたい。

## 5. 今後の目標

課題の出し忘れや、欠席により小テストが未受験となったりグループ相互評価の評価点が見つからないなどの現象が生じており、学生にそれぞれの取り組みの位置付けや重要性の理解を促す働きかけや、小テストやグループワークの時間は、体調不良などやむを得ない場合を除いて出席できるよう学生自身がスケジュール管理できるよう促す必要がある。

また、学生が楽しんで授業に参加できるようにする仕組みづくりを、他の先生方との交流を通してや、研修を受けるなどして学び、スキルアップさせていきたい。

### ・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

母性看護学概論のシラバスを別添する。授業アンケートの結果は大学ホームページで公開されているとおりである。

# 母性看護学概論

## I 科目の概要

1. 区 分: 専門教育科目
2. 開講時期: 2年次前期 (月曜日2限目) ※一部変更あり
3. 単 位 数: 2単位(30 時間)
4. 教 室: 2号館 2501 講義室
5. Google Classroom クラスコード: [REDACTED]
6. 担当教員: 服部 律子 ([REDACTED] 研究室)
7. 授業の概要: この科目では、母性看護の基本となる概念、母性看護の理念や変遷、母子関係や家族関係、母子を取り巻く環境や施策・制度について学びます。  
さらに、女性の生殖機能、ライフサイクル各期の心身の変化と健康課題について学び、リプロダクティブヘルス/ライツを基盤としたライフサイクル各期の女性への看護について学びます。  
また、女性のライフサイクル各期の健康問題、女性の健康の維持・増進、疾病予防に向けた看護について理解します。

## II 到達目標

この授業では、次のような目標を達成することを目指します。

1. 母性看護の基盤となる概念について説明できる。
2. 母子関係や家族関係、母子を取り巻く環境の変化や母子とその家族のための施策や制度など母子や子育て期の家族の置かれている環境について説明できる。
3. 女性の生殖機能とライフサイクル各期の心身の特徴、健康問題について説明できる。
4. セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツを基盤としたライフサイクル各期の女性への看護について考えることができる。
5. 女性の健康の維持・増進に向けた看護について考えることができる。

## III 受講の要件

この科目を受講できるのは、1 年次に開講された専門基礎科目と専門科目の必修科目を全て履修した学生です。

## IV テキストと参考図書

1. テキスト
  - 1) 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学 1 母性看護学概論 第 13 版、医学書院
  - 2) 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学 2 母性看護学各論 第 13 版、医学書院
2. 参考図書
  - 1) 系統看護学講座 専門基礎分野 人体の構造と機能1 解剖生理学 第 9 版、医学書院
  - 2) 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 成人看護学9 女性生殖器 第 14 版、医学書院
  - 3) 系統看護学講座 基礎分野 心理学 第 6 版、医学書院                    その他、授業中に適宜紹介します。

## V 授業の進め方

1. 授業方法: 講義、ペアワーク、グループワークを組み合わせる授業します。
2. 受講の準備
  - 1) 各回の授業内容をシラバスで確認し、各授業のテーマに関するテキストのページに目を通してきてください。
  - 2) 事前学習がある場合には、Google Classroom で配信、または、授業の中で説明します。必ず、事前学習を済ませ、それを持って授業に来てください。
  - 3) 授業で提示するパワーポイントの資料は当日配布します。
3. 受講にあたってのルール
  - 1) 授業開始前に課題などを返却することがあります。授業開始までに受け取ってください。
  - 2) 授業中は私語を慎み、他の学生の迷惑になるような行動をしないでください。
  - 3) 20 分以上の遅刻・早退は欠席とします。公共交通機関の遅延などやむを得ない事情による場合には、「令和6年度履修の手引」に従い、必要な手続きをすること。
  - 4) 履修登録、最終評価の受験資格、成績評価、公欠、追試験や再試験は「令和6年度履修の手引き」の通りです。
4. グループワークをする時のルール
  - 1) 必ず全員が発言をしましょう。
  - 2) 発言する時は、1 人ずつするようにしましょう。
  - 3) 自分が調べたことや、自分が経験したことに基づいて発言するようにしましょう。
  - 4) 批判するのではなく、代わりに自分の提案するようにしましょう。
  - 5) グループのメンバー間での、言葉や態度での暴力はやめてください。
5. 事後学習
  - 1) 授業での学びを整理し、不明瞭な箇所は質問するなどして、確実な理解となるように取り組んでください。資料の「丸暗記」ではなく、具体的な“ストーリー”で理解するようにしましょう。
  - 2) 事後課題がある場合は、授業の後に、その課題に取り組んでください。取り組み方や課題の詳細は、授業の時に説明します。
  - 3) 事後課題の提出期限や方法はその都度説明します。
6. その他  
授業に関する連絡は、原則、Classroom からお知らせします。  
テキストのページは、web 版の系統看護学講座のページを示しています。  
「概論」は1[系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学 1 母性看護学概論]を、  
「各論」は[系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学 2 母性看護学各論]のことです。

## VI 授業スケジュール

回	内 容	開講予定日
1	ガイダンス、母性看護とは この科目で何をどのように学ぶのか、母性看護が指すもの、 母性看護の対象や場面、方法	4/8
2	母性とは 母性とは、親になるとは、母性・父性・親性、maternal identity、 母親役割、母子関係、父子関係	4/15
3	母子関係と家族の発達 母子関係、愛着、母子相互作用、家族の発達段階、家族システム、 母性の世代間伝達	4/22
4	母子を取り巻く環境 母子保健統計の動向、母子保健の施策と変遷、社会文化的環境の変化	4/29
5	母子保健に関する制度 周産期医療システム、母子保健法、児童福祉法、児童虐待防止法、その他の母子 に関連する法律、子育て支援に関する施策	5/13
6	セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ 定義、課題・問題、リプロダクティブヘルスライツを守るためにできること	5/20
7	セクシュアリティ・ジェンダー セクシュアリティの概念、セクシュアリティの発達、性の分化、性の多様性 人間の性行動	5/27
8	女性の生殖機能 生殖器、性周期、妊娠のメカニズム	6/3
9	ライフサイクル各期の心身の変化1 思春期、成熟期、性周期の変化、性行動、性意識、プレコンセプション・ケア	6/10
10	ライフサイクル各期の心身の変化2 成熟期、更年期、妊孕性、生殖補助医療、更年期障害	6/17
11	ライフサイクル各期の健康問題と看護1 DV、性暴力被害	6/24
12	ライフサイクル各期の健康問題と看護2 月経異常、月経随伴症状	7/1
13	ライフサイクル各期の健康問題と看護3 人工妊娠中絶、性感染症	7/( )
14	母性看護と倫理、意思決定支援 生殖補助医療、出生前診断、倫理的課題、意思決定を支える看護	7/15
15	まとめ 14 回の授業を通して、母性看護の対象や母性看護の果たす役割、母性看護のあ り方等についてグループで話し合い発表する。	7/22

一部、休講と補講があります。開講日と時間帯に注意してください。

休講する日:7/8

補講予定:月曜1限の「成人老年看護概論」の空いている1コマ

※状況により変更する場合は、Google Classroom でお知らせします。

## VII 成績評価

以下の項目で評価し、合計して60点以上を合格とします。合格の場合の成績ランクについては「令和6年度履修の手引き」のとおりです。

合格点に達しなかった場合、再試験を実施します。再試験は筆記試験で行います。筆記試験(再試験)の範囲等は該当者に説明します。

筆記試験 50%	<p>①期末試験 40%</p> <p>期末に、知識を確認する筆記試験を行います。知識の確認の対象になる箇所は、主に、授業の目標の中で、「説明できる」と書かれている内容に関する部分です。</p> <p>②ミニテスト 10%</p> <p>授業中に実施するミニテストの合計点を、10%分に換算します。どこをミニテストするかは、今は秘密です。</p>
レポート課題(事後課題) 30%	<p>授業の中で事前課題、または事後課題として提示した課題の成果を評価します。評価対象になる課題は、課題の提示時に説明します。</p>
リフレクションへのコメント 10%	<p>授業の最後に記入する授業のリフレクションの15回分の内容を評価し、10%に換算します。</p>
グループワークの相互評価 10%	<p>グループワークへの貢献度をグループ内で相互評価します。</p>

## VIII 受講者の皆さんへのメッセージ

母性看護学概論では、妊娠・出産・子育てといった周産期で看護する場合に限らず、すべての看護場面で必要となる「母性看護学の観点」の基礎となることからについて学びます。私たちの周りには、母性看護学に関連するテーマの報道があふれています。この授業で扱う内容は、私たち自身や身近な人の多くが経験することです。自分の問題として取り組むと興味が湧いてくると思います。皆さんの主体的で積極的な参加を期待します。

授業中の質問、授業後の質問は大歓迎です。皆さん一人一人が自分のこととして考え、積極的に取り組んでくださることを期待しています。

【研究室】1号館3階 H23 研究室または学部長室のどちらかにいます

【メールアドレス】 XXXXXXXXXX

【オフィスアワー】月曜日 16:20 ~ 17:50

※実習などで不在にすることもあるので、これ以外の時間でも、研究室にいればOKです。空いている時間を確認したい場合には、前日までにメールで問い合わせてください。

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部	氏名	上野栄一
-------	--------	----	------

## 1. 教育の責任

奈良学園大学では、学位授与の方針DPとして、「奈良学園大学は、高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献できる人材を育成するため、学士課程に定める所定の単位を修得し、以下のような「実践力」を身につけた学生に、学位を授与する」とあり、また、看護学科では、DPを「本学看護学科は、幅広い教養と豊かな人間性、国際性、変化に対応できる汎用的能力などをそなえ、「人」を中心に据えた専門的知識と高度な技術、創造力、実践力、協調性を身につけた質の高い看護職者を育成するため、所定の課程を修め、132単位を修得し、次の能力を修得した者に学士（看護学）の学位を授与する」とあるように、看護学科での教育はこれらを達成するために必要な担当する授業科目の中に設計しながら行ってきた。特に大学は主体性が重要であり、各担当授業科目で、授業目標にそった授業をしてきた。担当科目について：学部では、精神看護学特論、保健医療学概論、チーム医療論、チーム医療論演習、カウンセリング論、看護研究、卒論を担当してきた。1) 保健医療学概論では、. 全人的ケア、QOL、日本の保健医療活動、ヘルスプロモーションの意義などを理解し、科学的、客観的な観点のみならず、身体的、心理的、社会的及びスピリチュアルな面を統合的、調和的に捉える全人的健康観を学ぶことを目標としてきた。2) 2学年の精神看護学は、目標を、人の精神機能とこころの発達、こころと精神機能の健康について理解し、人々を取り巻く社会の価値規範やしきみがライフサイクル各期の精神の健康に及ぼす影響を学ぶことを目標としている。人のこころと身体は相補に影響していることを学び、人権擁護の観点からも理解できるようにすることが教員としての責務と考えている。3) 4学年のチーム医療論では、目標として、チーム医療の歴史、チーム医療の協調性、責任感、コミュニケーション能力の必要性を理解し、様々な看護の場におけるチーム医療の在り方について考察することを目標としてきた。事例を多く用いて、視覚教材を用い、チーム医療の重要性について理解を深めることが大切である。。さまざまな専門分野の機能や役割を学び「学際性」を伸ばすことにより、医療現場において必要とされる資質を修得する。認知レベルの教育が多いが、看護援助につながるように、事例を用いて理解を深めるクフや、ビデオ教材を用いての授業を展開してきた。カウンセリング論では、心身の健康を損ない様々な困難を抱える対象と家族に対し、心に折り合いをつけながら自らの生にイニシアティブがとれるようサポートする基本的な考え方と技法を理解してもらうことを目標としてきた。またカウンセリングで必要な、基本的な技法を学び、患者のこころを捉える技法を理解してもらうために事例紹介して理解を深めてきた。

大学院では、医療倫理特論、精神看護学特論Ⅰ、精神看護学特論Ⅱ、精神看護特論Ⅳ、コンサルテーション論、在宅看護学特論Ⅱ、精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ、精神看護学演習Ⅰ、精神看護学演習Ⅱ、課題研究を受け持ってきた。大学院では、研究科の教育研究上の目的は、教育理念に基づき、在宅看護、育成看護、精神看護分野における専門性を深め、国内外で活躍することができる高度な看護実践者と看護の各分野における実践的教育の担い手及び研究者を育成することを目的としている。特に精神看護学はCNSの教育課程があり、専門的な知己のみならず、専門看護師として、精神を病む人に対して、その人と家族が安心して治療が受けられるアセスメントの視点と技術、そして早期に治療が受けられる支援、急性期の治療・看護を実践する能力を身に付けることを資材におき、看護学研究科のCNSを履修するコースにおいては、基盤科目16単位以上（国際医療特論、看護倫理特論、看護研究特論、臨床薬理学、病態生理学、フィジカルアセスメント12単位必修、コンサルテーション論、看護理論特論、看護教育学特論、看護管理学特論から4単位以上）、専門分野24単位以上（特論4科目8単位、演習2科目4単位、実習4科目10単位はそれぞれ必修、急性期精神看護学特論又は地域移行支援看護学特論からいずれか1科目2単位選択）、研究科目から課題研究4単位を加え、合計44単位以上を修得し、課題研究の成果の審査及び最終試験に合格することをもって修了要件としている。そのためには、講義の中では、理論のみならず、実践での活用ができるように詳細な事例展開を展開することにより、6つの役割について総合的に修得できるように授業展開をしている。

・次に、学生への指導については、各種学生支援：アドバイザー教員として担当の学生の定期的な面談をするとともに履修状況、学修方法などについてアドバイスをしてきた。また、大学院生に対しては、課題研究の取り組むための指導、特に研究計画書や課題研究の論文指導を定期に開催してきた。

## 2. 教育の理念・目的

自らの教育理念と目的と価値観・信念は次のとおりである。

・本学の示す「人を支える人になる」、をめざすための教育を心掛けた。また、「高度な専門学術知識に裏付けられた、実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」という本学の建学の精神」と保健医療学部の「幅広い教養と豊かな人間性、国際性、変化に対応できる汎用的能力を備え、「人」を中心に据えた専門的知識と高度な技術、創造力、実践力、倫理性、協調性を身につ

けた「保健医療従事者」の育成を目指しています。」とあるように、想像力、実践力、倫理性、協調性を大切にしながら、個人、集団、地域に貢献できる保健医療の専門職を目指す教育を目指してきた。特に精神看護学は、精神、こころ自体が眼に見えないという特徴を持つため、現象をいかにとらえるかといった心の評価方法や治療的なコミュニケーション技法についても教授してきた。さらに、「人と自然を愛する心を持ち、看護職に興味・関心のある人。また、確かな基礎的学力を有し、看護職者に必要な知識・技術を積極的に学び、地域社会、国際社会に貢献する意欲のある人」を目指すために、基礎から応用力を身に着けるとともに理解から実践できる能力を身に着けさせることを目的としてきた。基礎的なものは、理解レベルであり、応用は行動レベルであり、様々な事例を紹介し、どのように援助するかについて具体的に教授してきた。

- ・現在EBN、EBPの基づく実践が求められており、科学的根拠に基づいたケアの紹介にも力を入れてきた。
- ・国家試験対策については、授業の中で、看護師国家試験対策に関わる内容についても学生に適宜教授してきた。教育に対する価値観そして信念については、努力は必ず報われるをモットーに、あきらめない姿勢を学生そして大学院生に教授してきた。特に教育における価値観・信念は、努力すれば必ず成果があるということである。そのためには、学生の持つストレングスをみつけて、一人ひとりがもっている能力を伸ばす受容や学生指導をしてきた。

### 3. 教育の方法

○どのような方法で2の実現を図ろうとしているか

- ・学生との接し方については、学生の意見を受容し、十分に本人の気持ちを理解した上で、話を聴く姿勢を貫いてきた。現在、IT、AI等の発展により、デバイスを用いたコミュニケーションが主流になる中で、コミュニケーション能力の低下が危惧されている。また超高齢化社会が進む中、精神疾患も増加傾向にあり、このような医療情勢、社会情勢の中、アクティブラーニングを取り入れたり、学生の学びの評価やフィードバックを強化してきた。そのためには、一コマ一コマの授業内での授業の目標の明確化。授業終了後の理解度チェックをしていきた。さらに教材観として、わかりやすい教材作りをするとともに、視覚教材を適宜取り入れ、資料についても、理解を促進するために図表を多く用いる工夫をした。教育の方法の基本は、1) 広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟した人を育てる教育、2) 教育に対する使命感と情熱をもち、教育的な関係を築く力をつける教育、3) 教育の専門家として各教科の内容及び指導法を実践的に深める教育、4) 授業の進行については、視覚的に理解できるように、視覚教材を多用し学習の理解をうながしてきた。また、短い動画などを用いながら、モチベーションを高める教材を用いてきた。授業時間外の学習については、課題レポートを提出させたり、授業後の振り返りができるように、クラスルームを用いての資料の提示や学習相談を受けつけてきた。講義時において、その講義時に自らが興味を持った内容、あるいは疑問に感じた内容に関して、その理由や自らとの関連性を問う様な課題を課している。特に授業の開始時にどの科目も、今日の授業の目的やポイントをスライドなどで説明して関心を持たせるようにした。さらに授業中には双方向の授業の展開ができるように、質問をして、双方向の授業ができるようにしてきた。また、予習・復習についての学習時間を増やすために。次回の授業の予習事項を表示した。さらに、学習効果を上げるために、ミニツツペーパー（学習した内容、質問事項等）を授業の最後に記載していただき、理解度を高め、学生の質問にもフィードバックするよう工夫をした。さらに学修相談など双方向の学生とのコミュニケーションを円滑にするために、授業中での学生への質問をして学生の反応（理解力）をみながら進めた。また双方向の授業として、クラスルームを有効に活用し、学生との授業内容についての質疑応答について活用してきた。

[自己研鑽について] 本学のFD/SD研修会にすべて参加してきた。大変参考になる研修会であった。また学会では、日本精神保健看護学会、国際ケアリング学会、日本懸鼓心理学会、日本看護看護研究学会、日本看護科学学会に入会しており、学会で学んだ知見を授業に盛り込んだりして学習意欲を向上させる取り組みをしてきた。学生は学会について大変興味関心をもっていた。

[学生への支援] アドバーザー教員として、定期的な面談をしてきた。また本人の健康状態や、学習の震度などを定期的に聞いてきた。また、国家試験対策など、特別ゼミを開催をしてきた。

#### 4. 教育の成果

○その方法によりどのようなことが実現できたか

研修会資料P26～30、ワークシート課題3「教育の成果と課題」

教育の成果として、昨年担当した科目で全員が合格した。精神看護領域の科目カウンセリング論では、授業評価は、積極的参加、説明のわかりやすさ、説明のわかりやすさなど8項目中6項目が5点（最高点）であった。授業ではミニツペーパーも活用し、学んだ内容について記載するだけでなく、質問事項も記載していただき、次の授業に活かすといった取り組みをしてきて双方向の授業が活性化してきた。授業態度もよく、真剣に授業に取り組んでいる。学修効果としての評価は、全員合格であり、授業で工夫してきたミニツペーパーの活用は大きな効果があったと考える。今後は、さらにアクティブラーニング適宜も取り入れていき、学生が主体的に学べる、そして学習意欲を工場させるために一人一人の学修状況を鑑みながら授業を点かいしたい。

・達成できたこと、できなかったこと（達成レベル）：毎回どの授業でも、1)今日の授業で学んだことを述べてください。2)今日の授業で興味深いと感じた事象を書いてください。またその理由も記載してください。3)今日の授業で質問、気が付いた点があれば記載してください。達成できたことは学生の学習意欲が向上してきたことである。一コマ一コマの授業内容について、しっかりと授業目標にそった理解が出来てきたことである。

・授業アンケートの結果：カウンセリング論では、授業は積極的に参加していたが多く、また、授業の説明、資料についてはほとんど学学生がわかりやすかったと回答を得た。また、自由記載では、「」看護研究においては、実際に研究計画書を各課題があり、やってみてわかることが多い。卒業研究に向けた文献の調べ方、看護kねきゅ計画書の作成など、今後の研究に向けて必要な知識について深く学べたところがよかった。実際の論文を読みながら研究の方法や種類を理解することができてよかった。

配布資料の要点がわかりやすかったなどの意見があった。また、ミニツペーパーを毎回の授業で用いて、学習効果があったことがわかった。

・次に達成できなかったことであるが、主体的に学ぶ時間の確保（予習、復習の時間）がどれくらい確保できたかは、レポートの提出はあったが、どのくらい自分で復習されているかのデータはないので、今後は客観的に調べる方略を考えたい。

#### 5. 今後の目標

○今後どうしたいか

・短期的・長期的目標：短期目標としては、学習時間の確保を担保するために、授業の予習と復習について力を入れたい。そのために、学習課題を事前に出すようにしたい。他の担当されるされる先生方にも共有をしたい。長期目標としては、認知レベルから行動レベルにつながるように事例を増やして、精神看護で必要となる患者や家族への支援方法に力を入れたい。そのためには、学習意欲をさらに伸ばすように授業内容もさらに工夫をしたいと考えている。

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	岩本 淳子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 1995年に大学へ就任し看護学教育に携わって今年で30年になる。専門分野は「成人看護学」で、現在は「成人老年看護学領域」に属し、専門科目の「看護の考え方と方法」必修科目60単位の1/3、「看護の統合と実践」必修科目7単位の1/2の領域の責任者、そして学科長として看護学教育を実務的に運営する役割を担う。</p> <p>成人老年看護学領域の科目は、成人期から老年期までを連続線上でとらえ、各時期の発達段階や発達課題を踏まえながら健康の段階に応じた看護実践ができる基礎的能力を育成する科目である。予防の段階から健康段階を軸として、概論、援助論、援助論演習、実習へと段階的に学べるように配置している。</p> <p>担当の科目名と単位(時間)以下に示す。オムニバスで担当している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年次生:成人老年看護学概論(1単位15時間)</li> <li>・3年次生:成人・老年看護学援助論1・2(各2単位30時間) 成人・老年看護学援助論演習1・2(各2単位60時間) 成人老年看護学実習1・2(各3単135時間)、成人老年看護学実習3・4(各2単位60時間)</li> <li>・4年次生:統合看護学実習(1単位30時間)、統合看護論(1単位30時間)、看護研究(1単位30時間) 卒業研究(1単位30時間)</li> </ul> <p>2. 大学院看護学研究科:基礎科目(病態生理)、専門科目:在宅看護学(在宅看護特論 慢性期)を担当した。</p> <p>3. 教務委員会に属し、教育目的の実現に向け教育課程、授業、試験等をはじめとする教務の課題に取り組んだ。</p> <p>4. アドバイザーの学生支援:1~4年次生9名に対して大学の3つのpolicyを念頭に置いて個別の状況に応じた履修指導と学生支援を行った。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>・自らの教育理念と目的、価値観・信念 現代の社会情勢や疾病構造の動向を踏まえ、さまざまな状況に応じて看護の対象となる人々の健康課題と誠実に向き合い、看護の理論と実践の両面から看護を主体的に考え、実践・評価ができる人として学生を育成することを自らの使命と捉えている。</p> <p>そのためには、①看護の対象を生活の主体としてとらえ、個別性や強みを発見できる力②対象の健康段階や個別の状況に応じてより良い看護を追究できる力③論拠を確認しながら看護をプロセスとして確実に展開できる力④倫理原則に基づいて対象の自己決定を支援する力⑤課題解決に向け他職種と協働できる力⑥自己を振り返り主体的・自律的に学び続ける能力を育成すること、そして本学は、学部の上位に修士課程として看護学研究科が設置されていることから、将来における高度な教育研究を行う学習への橋渡しを支援することが、担当科目および学科運営の重要な課題として、日々の教育・研究に取り組んでいる。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>研修会資料P15~19、ワークシート課題 1「教育の方法とねらい」 成人老年看護学領域の科目は他の領域の科目に比べて単位数・時間数が多い。学習の難易度も徐々に増していくが、成人老年看護学の科目の授業が始まる2年生前期は、入学時に比べると大学への慣れや学習へのストレスが増して学習意欲が低下しやすい時期である。そのため、2年前期の概論では、今一度、学生の看護学への興味・関心を引き立て、学習内容の面白さを実感し、学習が今後の自己成長につながることを学生自身が体感できることが望ましい。またこの後に続く援助論や援助論演習の授業や実習でもっと多くを学びたいと期待するような学習体験の場を設けることである。</p>			

- ・「奈良学園大学コミットメント」に基づいて、学生の夢の実現に向けて応援することを基本としている。
- ・学習に関する学生の反応を情報収集し、分析し、効果的な学びが提供できるよう授業準備を行う。
- ・学生が自己の考えを安心して発言できるよう心理的安全性の確保に配慮している。特に演習や実習では助言を間違いの指摘と捉えてしまうと学習効果は著しく低下する。常に授業や演習、実習は学習の成果を確認する場であり、「看護の概念を知る」「概念を活用して行動する」「ともに育つため」にあることを説明している。
- ・学生の強みを発見し学習のモチベーションを維持する支援に活かしている。
- ・学びの継続に困難が生じた場合は、学生・保証人・アドバイザーによる面談への参加やアドバイザーからの報告を通じて、個々の立場上の考えを把握し学科として支援する課題を見出し対応している。

#### 授業の工夫(授業の方法・内容など)

授業を設計する際に大事にしていることは、臨場感あふれる事例を提示し、看護課題の発見と課題の解決に取り組むことにより、学生が複数の選択肢を客観的に比較検討して最も適切な選択肢を選ぶこと、意思決定にかかわったメンバーが課題解決の過程を可視化し受講者全体の共通認識を経て今後への学習意欲を醸成することにある。

90分間で検討できる内容は限られているため問いはシンプルにし、複雑な状況へ取り組む中で思考を揺さぶり、概念を活用しないと理解が深まらない教材を活用した。

#### 事例紹介と発問

テーマ:「大事な家族を突然亡くした家族の看護を考える」である。

対象:2年生前期 89名+アカデミーインターンシップに参加した高校生18名

方法:グループワークと全体討議

概要:40歳の女性が心肺停止状態で救命センターに搬入され、付き添ってきた義父の連絡を受け病院へ到着した後の家族(夫、長女、長男、実父母と家では寝たきりの義母)の反応を一人100文字以内で紹介した。

発問:看護の対象は誰ですか。優先順位をつけてその根拠を説明してください。

## 4. 教育の成果

#### 達成できたこと(達成レベル)

・看護の場の特徴として、救急場面における優先順位がどのようなプロセスを経て決定されていくかを根拠を示しながら理解できることを課題とした。学生が事例検討の課題に対して自身のキャリア形成の方向性を意識しながら持続的比較の問いに粘り強く取り組むことで、先の見通しが持て、概念や理論をよりどころとしてこれまで学習してきた知識を構造化できることを目指した。

成果としては、

- ・自分の家族と同年代の家族構成であったため、身近な事例として理解しやすかった。
- ・事前に事例を配布し、個人学習、グループワーク・全体討議へと段階的な学習を行ったことで、対象理解の視点が広がり、反応の理解が深まった。
- ・最初は自分と異なる意見に違和感を感じていたが、学生個々の意見を共有し、議論を経てグループの意見を合意形成するができた。根拠を説明できなかった学生も最後には自分の言葉で説明できるようになった。
- ・全体討議では異なる意見を集約していくことに困難を極めたが、よりどころを理論や概念で確認することで知識が構造化され、理論学習の価値を再発見する機会となった。

・授業アンケートの結果

86名の「非常に良かった」と評価が得られた。3名は「よかった」で、その理由としては、事例の課題に対して自分の学習経験では太刀打ちができないと記載されていた。

公開授業に参加された先生から以下のコメントを頂いた。

本日はまとめの授業であった。今まで授業で学んだ知識を統合して思考するものであった。事前に事例を提示し、個人ワークに取り組んだうえで、グループワークにより、他者の考えを取り入れながら考えを深めていくものであった。グループ毎の意見が共通するもの、異なるものに着目させながら、考えた根拠に問いかけることで学生の更なる学びの深化を促されていた。事例にある救急の場面では、看護の対象や内容についての優先順位の判断が必要となるため、その判断をどのような根拠に基づき行っていくのかということがわかりやすく伝えられていた。その根拠のよりどころとなる理論の活用についても関連させて教示されていた。学生の思考を揺さぶる課題の提示について、是非参考にさせて頂きたい。

## 5. 今後の課題

・短期的・長期的目標

(短期目標)

- ・学習者が主体となって探求的な学びができる教材を作成していく。
- ・看護場面に応用できる授業を展開する。・公開授業を通じて内容を洗練させていく。

・成人老年看護学領域の導入の授業としての効果を検証し、領域間の学習のつながりにおける効果や課題発見につなげる。

- ・看護学教育モデル・コア・カリキュラム改訂版と教育内容を照合し、不可分を補填する。

(長期目標)

- ・看護学教育から臨床への橋渡しがスムーズに移行できるよう両者の協力・連携による移行教育のありかたを再考したい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

成人老年看護学領域の授業アンケートを参照

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	看護学科	氏名	阪元 勇輝
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>担当している講義科目は、保健医療学部および人間教育学部の両学部において、共通教育科目である「環境化学の基礎」および「生活と環境」である。将来、主として医療分野や教育分野に従事することを目指している学生に対して、化学の基礎、環境問題および災害問題に関する基本的な事項から、より実践的な事項まで、身近な問題としてとらえることができるような授業を展開し、これらの問題に対してどの様に対処し、行動すべきなのかについて修得できる教育を担当している。また、保健医療学部の看護学科においては、「ラーニングスキルズ」および「ライティングスキル」、また、リハビリテーション学科においても、看護学科の「ライティングスキル」と同じ講義を担当している。</p> <p>担当科目の概要は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「環境化学の基礎」では、日常生活に関わる化学物質・化学反応やそれらに起因する環境問題について、それらのメカニズムや人体・社会・環境への影響を理解し、その影響を最小限に抑え、生活の質を向上させ、自然環境を守るための方策を考えることができることを目指している。</li> <li>・「生活と環境」では、日常生活に関わる環境問題や自然災害について、それらのメカニズムや人体・社会への影響を理解し、その影響を最小限に抑え、生活の質を向上させるための方策を考えることができることを目指している。</li> <li>・「ラーニングスキルズ」(看護学科)では、まず、大学での学び方を身につけ、文献や資料を適切に調べることができ、それらを分析的かつ批判的に読んだり、得られた情報をもとに、論理的かつ多面的に思考することができることを目指している。</li> <li>・「ライティングスキル」(看護学科・リハビリテーション学科)では、大学での学術的なレポート・論文の作成において、自分の意見を根拠を示しながら、かつ自分の意見と他人の意見を明確に分け、論理的な構成で示すことができることを目指している。</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>教育の理念・目的として、重要視していることは、主として、「自主的な学習」、「問題発見能力」および「問題解決能力」であり、それぞれの項目に対し、興味を持つように、また興味に対して論理的な考え方や展開ができるような教育を目指している。</p> <p>上記3点に関して、以下の様に考えている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1)「自主学習能力」:学術や技術などに常に探求心をもって自らが習得できる力の育成多面的な視点を持ち、常に自分の頭で考える思考性向の育成</li> <li>2)「問題発見能力」:上記1)の能力の育成することにより、自ずと様々な疑問点等が生じることとなり、必然的にそれらが課題や問題点となる。常に疑問点や問題を持ち続けることによる問題発見能力の育成</li> <li>3)「問題解決能力」:上記1)および2)の能力を育成することにより、その中から自らが興味を持つ疑問点や課題を問題点として捉え、それらの問題点等に対して、自らによる論理的な思考やアプローチにより問題解決する能力の育成</li> </ol>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>上述の教育理念に基づき、担当講義に関する基本的な知識および理論等の興味や理解を深めるために、できるだけ身近な問題や事象としてとらえることができるように、具体的でかつ日常的な多くの事例と関連づけて解説することを目指している。また、他の関連する専門科目の基礎となる、あるいは他の専門科目に応用ができよう知識や理論等を関連付けて解説するよう務めている。</p> <p>上記に関して、以下の様に考えて講義を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の進行:教科書や資料の文字や図だけでは理解しにくい専門的な内容について、独自に作成した資料等により実例、実写、動画などを用いながら可能な限りわかりやすく伝える。</li> <li>・授業時間外での学習:講義時において、その講義時に自らが興味を持った内容、あるいは疑問に感じた内容に関して、その理由や自らとの関連性を問う様な課題を課している。</li> <li>・テスト(成績評価):自らの興味や疑問点を掘り下げ学習する自主学習能力を育成することを目的とし、自らが選択したテーマ(疑問や問題点等)に関して、選択した理由や自らとの関連性およびその問題点等に関する自らの対応策を記述させる論述式の試験を課している。</li> </ul>			

#### 4. 教育の成果

両学部共通教育に関しては、アンケートによると、講義内容・資料等に関しては、「講義資料などが分かりやすく講義に取り組みやすかったです。」「教科書を使うだけでなく、自分の意見や考えを述べることができたので考えやすかった。」等があり、課題等に関しては、「自分で調べて文を構成するので文章力が高められるところ。」「自分で資料を読んでそれについて書く際に自分でも調べて書くようにするといろいろなことを知識として吸収できました。」等の肯定的なコメントであるが、一方で、少数ではあるが、「講義内容が難しすぎる」、「1年次で行う講義内容ではない」等の否定的なコメントもある。今後の講義に向けて、各講義で肯定的なコメントが得られた部分に関しては今後も継続し、否定的なコメントが得られた講義の難易度の部分に関しては、各講義の難易度を検討するとともに、より良い講義方法を模索を行っていく必要があると考えている。

#### 5. 今後の目標

##### 1) 短期的な目標

1. 身近な問題としてとらえることができるような事例・実例の導入
2. 授業時間外により自主的に学習するような課題や目標の設定
3. より理解しやすい、講義・学習ツール(画像、動画等)の発掘

##### 2) 長期的な目標

1. 学生のレベルに沿ったテキストの発掘、あるいは開発
2. 助言のみで、学生が自主的に学習する環境づくり
3. 最新の知見を講義に取り入れる

・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

・ 添付資料無し。

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	西菌 貞子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>学部教育においては、1年生・2年生・4年生を対象に、計15科目の授業を担当し、看護学の基盤教育に携わっている。看護専門職としての基礎的知識・技術のみならず、倫理観や人間理解を重視した教育を通して、卒後に社会の中で自律的に活躍できる人材の育成を目指している。</p> <p>また、大学院教育においては、看護理論、看護教育、看護管理に関する科目を主に担当し、臨床現場において組織マネジメント力、高度な教育力や実践力を発揮できる人材の育成に努めている。加えて、理論と実践を往還しながら看護の発展に寄与し、次世代へと知と経験をつなぐ人材の育成を重要な教育責任と捉えている。</p> <p>2025年度の担当科目</p> <p><b>学部</b>・1年生担当科目：看護学概論Ⅰ、看護学概論Ⅱ、看護コミュニケーション、看護技術の基礎Ⅰ、基礎看護学実習Ⅰ          ・2年生担当科目：看護実践プロセスⅠ、看護実践プロセスⅡ、看護技術の基礎Ⅱ、基礎看護学実習Ⅱ          ・4年生担当科目：看護研究Ⅱ、看護管理学、看護教育学、チーム医療論演習、統合看護論、感染看護学、統合実習</p> <p><b>大学院</b>・看護管理特論、看護理論特論、看護教育特論</p> <p>各種学生支援：アドバイザー-学生への支援、教務部会、実習WG / 教務部会では、学生の学習効果が高まる教育実践に向けた時間割調整、試験実施計画調整などを行う。実習部会では、授業時間の25%を占める看護学実習の質の向上と、学生の実践能力の育成を目指して、①教育理念、ディプロマおよびカリキュラムポリシーの一貫性を踏まえた臨地実習の構成、②臨地実習指導体制づくり、大学-施設双方の連携などを行う。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>学生は、将来の社会を担うかけがえのない人材である。本学の理念である「明日の社会を開く人材育成」を基盤とし、多様な価値観が共存し、急速に変化する時代においても、主体的に未来を切り拓くことのできる人材の育成を教育の目的としている。</p> <p>具体的には、学生自らが問いを立て、実践を通して検証し、解決に向けて試行錯誤を繰り返しながら、「より良い看護とは何か」を探究し続ける姿勢を育むことを重視している。この過程を通して、変化する社会や多様な価値観の中にあっても、自ら考え、判断し、実践を改善し続けることのできる人材の育成を目指している。</p> <p>教員としての最大の喜びは、学生一人ひとりが学びを通して成長し、自らの可能性に気づき、次の段階へと歩みを進めていく姿を見ることである。今後も学生の成長を支える伴走者として、教育実践の質の向上に努めていきたい。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>・学生とのかかわり</p> <p>学生の意見や考えを否定せず、常に耳を傾ける姿勢を大切にしている。学生が抱く疑問や懐疑をそのままにせず、興味・関心を手がかりとして問いを深められるよう、教員が一方向的に答えを示すのではなく、学生と並走しながら探究的思考を広げる関わりを心がけている。学生が安心して意見を表明できる学習環境を整えることが、主体的な学びの基盤になると考えている。</p> <p>・授業の工夫</p> <p>学生が「何を学び、どのように学びを深めるのか」を理解し、能動的な学習者として授業に参加できるよう、授業目標の明確化と共有に注力している。</p> <p>断片的な知識の習得に終わらせず、臨床や実践の場で活用できる「生きた知識」として定着させるため、全ての担当授業において、毎授業後に「学びの振り返り」を実施し、200字～1000字程度で学びを言語化することを求めている。学生が自らの言葉で学びを表現し、疑問や気づきを自由に記述した内容は次回の授業に反映させ、全体での理解の共有や学びの深化につなげている。また、「看護実践プロセスⅠ・Ⅱ」においては、ディープ・アクティブラーニングの一つであるIBL学習法（課題発見・課題解決型学習）を導入し、臨床場面で求められる仮説-論証力およびチームで協働する力の育成を図っている。探究型学習の根幹となる課題発見力の育成については、学生が自ら問いを見出せるよう、事例提示や問いかけの工夫など、各科目の特性に応じた教育的仕掛けを行っている。</p> <p>・SD・FDへの参加</p> <p>本学で開催されるSD・FD研修会には継続的に参加している。さらに、他大学が主催する教学マネジメントや教育改善に関する</p>			

研修にも積極的に参加し、教育の質保証やカリキュラム設計に関する知見を授業実践に還元している。

また、他大学からFD研修の講師依頼を受ける機会もあり、教育実践を言語化・理論化し、共有する立場としての役割も担っている。

これらの経験を通して、常に質の高い教育設計とは何かを問い続け、学生の学びの深化につながる授業改善を継続的に行っている。

#### 4. 教育の成果

##### ・教育成果

各授業で実施している「学びの振り返り」における学生の記述内容の変化や深まりから、授業の進度に応じて学生の理解や思考が発展している様子を確認しており、学修の質的向上と学生の成長を実感している。初期には知識の整理にとどまっていた記述が、次第に自身の考察や疑問、実践への応用を含む内容へと変化しており、主体的・探究的な学びが定着しつつあると評価している。また、演習および臨地実習においては、教員間の連携が教育効果に大きく影響すると考え、担当教員間で授業・実習の目標や指導方針の共有を密に行いながら教育を進めてきた。その結果、学生が学習成果を実感し達成感を得ている姿が多く見られるようになり、教育効果の向上とともに、教員自身も教育実践に対する一定の手応えと充実感を得ることができている。

さらに、4年生の統合実習においては、「自らの実習を学生がデザインする統合実習」～研鑽し続ける能力の育成～を目標に掲げ、学生が探究したいテーマに基づいて学びを深められるよう、実習病院の開発および実習施設との連携強化を図っている。学生自身が目的意識をもって実習に臨むことで、学びの充実感や満足感を示す声が多く聞かれ、自己の成長を実感しながら学修を進めていることが確認されている。

#### 5. 今後の目標

##### ・今後の展望

学生の能力向上には、個々の努力に委ねるのではなく、教育者による戦略的かつ組織的な関わりが不可欠であると考えている。今後は、領域内の教員連携にとどまらず、領域間、学科、さらには学部全体で、本学の学生をどのような人材として育成し、どのような能力の獲得を目指すのかについて、目的や到達像を共有するための活発な討議を重ねていきたい。

また、看護師としての生涯にわたる能力育成の視点から、在学中のみならず卒後も含めた継続的な能力獲得状況を可視化し、教育の質向上につながる仕組みづくりが重要であると考えている。客観的な指標の一つとして開発した「看護師版PROG」を活用し、本学教員間での情報共有に加え、他大学とも連携しながら、看護職の人材育成に関する実証的かつ発展的な教育実践に取り組んでいきたい。

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	小池 伝一
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 保健医療学部看護学科における教育</p> <p>1) 小児看護学における教育計画立案・教育内容のマネジメント、実習施設との教育内容・指導方法の調整をおこなった。 2)</p> <p>令和7年度は以下の科目を担当し、共通教育および看護学教育を実施した。</p> <p>(1) 1年次生；暮らしと地域社会</p> <p>(1) 2年次生；小児看護学概論、小児看護援助論</p> <p>(2) 3年次生；小児看護援助論演習、小児看護学実習</p> <p>(3) 4年次生；卒業研究、統合看護実習、国際看護論、国際看護論演習、家族看護論、統合看護論</p> <p>2. 大学院看護学研究科における教育</p> <p>令和5年度は、育成看護学Ⅲを担当し、大学院教育をおこなった。</p> <p>3. アドバイザーとして、1年次生 4名、2年次生 2名、3年次生 4名、4年次生 4名を担当し、学修・学生生活への支援をおこなった。</p> <p>4. 看護学科では、教務委員会および実習WGの委員、FD委員会の副委員長、キャリア支援委員会の委員長として、看護学科の教育向上へ向け、履修の手引きの検討などに、学生の就職支援および国家試験合格に向けた支援をおこなった。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>まず、学生が、学修を積み重ねるに従い、自律的に考え、倫理的規範を基に主体的に行動できる看護職を歩めるよう、教員は関わる。次に、学生が看護の職能集団として根拠に基づいた看護を展開し、活躍できることを目的として、教員は教育に関わる。そのために教員は、学生一人ひとりの考えを基本とし、学生自身の考えを大切に行動できるように、かかわる。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>1) 学生とのかかわり方</p> <p>教員が答えを提示するのではなく、学生の考え・意見・理由を聞き、学生の考えを受け止める。その上で、学生自ら改善点などを主張できるよう思考を整理し、学生の考えを導く。</p> <p>2) 授業の工夫</p> <p>初回授業で、15回の内容・課題・評価基準について提示し、学生が主体的に学習計画が立案できるよう、学修前後の予習・復習内容を具体的に提示した。次に、できるだけ学生の疑問に答え、学生自ら答えを出せるよう、授業終了後に、リアクションペーパーを用いて疑問を拾い上げ、次の回の最初に疑問を学生と共に考える方法を用いて、フィードバックした。授業方法では、小児看護における主要なテーマに沿って配列を整え、学生がテーマを踏まえた学習できるようにした。看護援助の実際における学修指導については、実習施設における臨床看護師と協働して事例を作成し、学生に看護過程を展開してもらい、模範となる考え方について詳説した。また、小児看護援助論では、事例を用いて、フィジカルアセスメントから看護援助への考え方についての思考方法における課題を2回提示し、臨床推論を深めるための支援をおこなった。</p> <p>3) 研修会への参加</p> <p>学内におけるFD・SDの出席、文部科学省・総務省・経済産業省主催の研修会に参加し、他職種や教員と情報交換をおこなった。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>研修で得た成果を参考にし、学生の考えや学生の回答を尋ね、それを基に授業を進めることができた。学生たちは、自らの考えを自分の言葉をとおして回答し、回答を基に小児看護場面における事象について考察し、そこから学生の考え方を広げることができた。授業評価アンケートでは、概ね4.0以上の評価を得ることが出来た。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>1) 短期的目標</p> <p>(1) 小児看護展開における臨床推論を深めるための教育を構築し、学生が体系的に考えることができ、小児看護学実習にてその成果を発揮することができる。 (2)</p> <p>在宅看護論・母性看護学など小児看護学との関連領域における学習を踏まえ、それぞれの領域との関連性を考慮しながら、教育を実践することができる。</p> <p>2) 長期的目標</p> <p>2022年度カリキュラムの完成年次を迎えることから、小児看護学教育における評価をおこない、小児看護学領域およびカリキュラム全体の教育効果を踏まえながら、小児看護学教育におけるカリキュラムの改善に向け、取り組む。</p>			
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）</p>			

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	小林由里
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1)2024年度担当科目:看護学概論Ⅱ、コミュニケーション論、看護技術の基礎Ⅰ・Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅱ、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究Ⅰ・Ⅱ、統合看護論、統合看護実習、看護管理学、感染看護、ターミナルケア論、看護管理学特論(大学院)、看護理論特論(大学院)</p> <p>2)各種学生支援:2024年度:アドバイザー学生への支援、キャリア部会、教務部会、全学教務委員会、自己点検自己評価委員会、入学前スクーリングプロジェクト</p> <p>教務に関しては、本学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーにそった教育の実践と、学生の学習効果が高まる教育に向けた、時間割の調整や、試験実施計画、講師との調整などを行っている。また、学修を主体的に進めることが困難な学生のフォローアップについて検討する。4年次生の卒業研究Ⅱにおいて、論文執筆、提出に向けたオリエンテーションやスケジュールの計画と抄録集の作成を行う。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>本学保健医療学部の教育目的、ディプロマポリシーに則り、教育活動においては、以下の3点を目的としている。</p> <p>1)看護の対象を生活者として捉え、尊厳をもったかけがえのない一人の人として対応できる豊かな人間性の育成</p> <p>2)看護実践において必要な基礎的な知識、技術の習得と自ら考え判断し、実行できる力の育成</p> <p>3)誠実で、倫理的判断や意思決定ができる力の育成</p> <p>人の多様性を受け入れ、認められる人間性と誠実さは、人を対象にした看護職に大切なことであると考えている。また、主体的に学び、看護職としての創造力、思考力、判断力や実践力を持った人の育成を目指している。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>1)授業の工夫:各授業の目標を毎回の授業前や授業終了時に提示・説明し、学生が毎回どのようなことを学ぶのか心づもりができるよう工夫している。特に1,2年次は、看護の初学者であり、看護実践場面のイメージがしにくいいため、できるだけ臨場感を持たせる演習方法を工夫している。また、技術演習の事前事後には、自らの疑問を整理し、演習での体験により疑問を解消できるようにすることや、実習体験を想起し、園主後にその意味づけ・深化を促すような課題を提示している。学生が、自ら考えながら取り組むことができるよう、様式の工夫や学習量を調整している。看護実践は、手順や方法がわかればよいのではなく、その対象が一人の尊厳ある人であり、生活者であるという意識をもち、倫理的にも配慮した関わりについて考えることができるよう、発問などで問題提起をして思考を促している。さらに、学生が、看護に関心を高め自分のキャリアデザインを開発していけるよう、また自ら主体的に学ぶ力の育成をねらい、私自身の臨床での経験を教材化して活用している。特に、看護実践における安全と倫理観は不可欠であり、各講義・演習・実習指導に当たっては、強調して教育内容に取り入れている。</p> <p>2)学生へは、自分の考えを自分の言葉で語れるようになってほしいと考えており、実習などでは、自らの学びのプロセスを語ってもらうようにし、学習者の学習目標到達度を確認している。学生がどのように感じ、考えているのかを共有しながら、目標到達へ導くように心がけている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>1)授業の工夫:演習では、単に技術の方法を修得するにとどまらないよう、事例を用いてどんな対象になぜその支援が必要なのか、なぜその方法で行うのかを考えることに重点を置いた。学生は、それぞれテキストや資料を用いて課題学習に取り組み、演習ではグループワークを通して試行錯誤し、他者の意見も取り入れながら体験と思考を繰り返して学ぶことができていた。授業アンケートにおいても、事前課題は、演習準備として適切であるという反応や、グループワークは他者の意見を取り入れながら取り組めるため学びが深まるという反応があった。特に1年次は基礎看護学実習Ⅰの体験を想起させる課題学習を取り入れたことにより、演習で実際に体験する際に、見学した看護師の実践を意味づけすることができ、学びが深まっていた。</p>			

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	小林由里
<p>毎回、最初に前回の授業・演習の振り返りについてフィードバックすることで、学生の思考を揺さぶり、さらなる思考の深まりにつなげることができた。ただ学びの深さには個人差があり、個々の力量に合わせた支援が必要である。自身の臨床での経験の教材化についても、学生からの授業後振り返りシート等の記載から、イメージ化につながったという反応があったので、今後も活用していく。4年次の演習では、卒業前のDP達成を自己評価しながら、汎用的能力の獲得をめざした授業設計を行った。臨床現場で体験する様々な事例や場面設定をし、思考しながら看護実践することを目指した。学生の授業アンケートからは、「卒業前に自己の課題が明確になり良かった」「卒業後の臨床判断や看護実践へのイメージができた」など良い反応があった。</p>			
<p><b>5. 今後の目標</b></p>			
<p>1)短期目標:①看護実践の基礎となる知識・技術について、学生が自ら考え、主体的に行動して実践できる教育の実践。 ②看護の対象を尊厳をもった一人の人と捉え、倫理原則に基づき判断し、行動できる力を育成する。 2)長期目標:自ら考え、行動できる力、臨床判断力など、専門職業人として必要な、汎用的能力をもった学生の育成をめざし、引き続きアクティブラーニングやIBL((Inquiry Based Learning)などの教育方法の修得を目指し、活用できる。</p>			
<p><b>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス、授業評価アンケート等)</b></p>			
<p>自らの授業実践力や教育力、研究実践能力の向上のため、本学のFD/SD研修への参加はもちろんのこと、学外の研修会へ参加している。学会については、日本看護学教育学会、日本看護診断学会、日本看護研究学会、日本エンドオブライフケア学会、日本看護診断学会に所属している。「基礎看護学実習Ⅰの体験想起を活用した看護技術における学びのアウトプット」をテーマに研究に取り組み、2024年8月開催の日本看護研究学会第50回学術集会において発表を行った。</p>			

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	4	2	必修
担当教員			
岩本 小林 看護学科教員一同			
木曜・2限	HN1i505	DP1-1・1-2・2・3・4	
添付ファイル			

授業の目標・概要	臨地実習で体験した学びを振り返り、各看護学領域での学びを統合させ、生活調整や包括支援の観点から、看護文脈の中で対象となる人々や現象を捉えて判断する力を培う。体験してきた学びを看護の基本となる理論と再統合させたり、看護実践の根拠となる法律や活用できる制度を再確認したり、看護学の領域の枠組みを超えて看護学を実践できる力を高める。
学習の到達目標	専門分野の実習を学んだ最終段階で、既習の知識・技術・態度を統合させ、患者にとっての「より良い」を目指した看護の判断・実践・評価ができる。 1. 複数の患者の経過に応じて状態を把握し、必要なケアを判断することができる。 2. 複数の患者へのケアについて、優先順位を判断することができる。 3. 既習の知識・技術・態度を統合させ、患者の個別性に合わせたケアの実践および評価ができる。(安全・安楽、自律・自立) 4. 複数患者の看護実践において、タイムマネジメントができる。 5. 医療チームの一員として看護チーム内および多職種と効果的なコミュニケーションをとることができる。 6. 自己を振り返り、将来の看護師像を確立し、今後の課題を明確にする。
授業方法・形式	講義・演習・グループワーク eラーニングなど事前課題が課される。
授業計画	<p>第1回 ガイダンス 担当：岩本・小林 内容：各看護学の学びの統合とは 事例紹介 ペア (PNS) の決定</p> <p>第2回 事例検討1 情報収集とアセスメント (個人ワーク) 担当： 内容：本日のケアを実践するにあたり、収集すべき情報とその解釈 受け持ち患者 (複数) の現在の状態や成り行きのアセスメントと援助の判断</p> <p>第3回 事例検討2 情報収集とアセスメント (個人ワーク、ペアワーク) 担当： 内容：受け持ち患者に必要な看護について、PNS (ペア) と共有 受け持ち患者 (複数) の優先順位の判断 ワークシートの作成 (1日のケアスケジュール立案)</p> <p>第4回 事例検討3 情報収集とアセスメント (チームカンファレンス) 担当： 内容：患者の状態についてのアセスメントおよび優先順位の共有 さらに必要だと考えた情報の情報収集</p> <p>第5回 演習 (実践) 1 複数受け持ち患者へのケア実践および評価 担当： 内容：優先順位、個別性、安全・安楽、自律・自律、タイムマネジメント、リスクマネジメントの観点などから看護を実践する。 看護チームの一員としての連絡・報告・相談</p> <p>第6回 演習 (実践) 2 複数受け持ち患者へのケア実践および評価 担当： 内容：優先順位、個別性、安全・安楽、自律・自律、タイムマネジメント、リスクマネジメントの観点などから看護を実践する 看護チームの一員としての連絡・報告・相談</p> <p>第7回 事例検討4 (変化する患者の情報収集とアセスメント：個人ワーク：ペアワーク) 担当： 内容：患者の状態の変化に対するアセスメントと援助の判断</p> <p>第8回 事例検討5 (変化する患者の情報収集とアセスメント：チームカンファレンス) 担当： 内容：退院に向けた支援の必要性 チーム連携とコンサルテーションの必要性 (CN, CMSなどの看護のスペシャリストへのコンサルト、他 (多) 職種連携 (医師、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士、薬剤師、MSW、管理栄養士、臨床心理士など)</p> <p>第9回 演習 (実践3) (患者の状態の変化に対する援助の判断と実践) 担当： 内容：患者の状態の変化に対しアセスメントし、判断した援助を実践する。</p> <p>第10回 演習 (実践4) (退院支援・チームカンファレンスの実際) 担当： 内容：患者カンファレンスのロールプレイ 退院支援に向けての課題と対応 患者の介護度、支援体制を共有し、暮らしを支える社会保障制度や資源についてディスカッションする。</p>

	<p>第11回 事例検討5 (ペアワーク、チームカンファレンス) 担当： 内容：患者の状態の変化に対するアセスメントと援助の判断について、実施後の振り返り</p> <p>第12回 事例検討5 (ペアワーク、チームカンファレンス) 担当： 内容：退院に向けた支援や、チーム連携とコンサルテーションの必要性について、実施後の振り返りを行い、計画修正</p> <p>第13回 演習 (実践5) (ブラッシュアップしたスケジュールに基づき、ケア実践) 担当：</p> <p>第14回 演習 (実践6) (ケア実践の評価) 担当：</p> <p>第15回 学びの発表、まとめ</p>
成績評価の基準	授業ごとの課題レポート、講義・演習・グループワーク等の取り組み状況、振り返りレポート内容等で総合的に評価する。
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法	毎授業で前回授業の学び、振り返り内容を共有する。授業ごとに、学習目標に対する到達状況をSelf-Assessment (自己分析・評価) し、今後の課題を明らかにしながら学び深めてほしい。
準備学習・復習及び授業時間外の課題	人体構造機能学や疾病治療論等、看護実践における判断に必要な専門基礎科目の知識や、看護の対象の理解に必要な共通教育科目の知識はもとより、各看護学で学んだ看護実践プロセスの思考過程について復習し、その知識を授業で活用できるように準備する。各授業時間の課題に取り組むために必要な事前課題を提示する。
履修上のアドバイス及び留意点	4年次までに既習した全ての科目で学習した看護実践課程の知識・技術・態度を統合する科目である。臨床判断力や思考力の強化が必要であり、意識的に関連して考える力を身につけて欲しい。グループでの取り組みや、体験学習が中心となるため、出席は前提とし、主体的な学習で学びを深めることを期待する。
教材・教科書	適宜、指示する
参考書	各領域で使用しているテキスト・授業資料
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL (課題解決型学習)</li> <li>■反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>■プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>■自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>各専門領域における臨床での看護実践の経験</p>

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	蓮池光人
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>精神看護学領域で教鞭をとっている。精神看護学の講義では、疾患に関する知識や看護についてはもちろんのこと、看護の対象となる「人間」「こころ」にも焦点をあて、深く追求し、看護師としての知識や技術だけでなく、「こころある看護師」の育成を行っている。</p> <p>1. 保健医療学部看護学科における教育            2年次生：精神看護学概論、精神看護援助論            3年次生：精神看護援助論演習、精神看護学実習            4年次生：カウンセリング論、卒業研究Ⅱ、統合看護論、統合看護実習</p> <p>2. 大学院看護学研究科における教育            地域移行支援精神看護学特論、急性期精神看護学特論、精神看護学演習Ⅰ、精神看護学演習Ⅱ、コンサルテーション論、看護研究特論、看護理論特論、ヘルスプロモーション論、特別研究、課題研究</p> <p>3. 各種学生支援            アドバイザー学生への支援、1年生学年アドバイザー、大学学生委員会、看護学科学生生活委員会、看護学科広報部会、看護学科実習WG、オープンキャンパス</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>学修の主体は学生であり、学生が自主的に積極的に楽しく学ぶ環境づくりを心がけている。学生が楽しく学ぶことが学修効果を高めより多くのものを得ることができる。ひとりひとりと真摯に向き合い学生を大切に、相互浸透できる関係性を目指す。</p> <p style="text-align: right;">1. 自ら</p> <p>の教育理念と目的</p> <p>1) 学生が自ら考え主体的に学ぶ環境を作り支援すること            2) 学生ひとりひとりが、持てる力を最大限に発揮しその人らしく成長するための支援をすること            3) こころのある看護師として成長していくため、相手の立場に立ち、相手の思いを思い描き、相手のことを思いやれる人間力の向上のための支援をすること</p> <p>2. 価値観・信念</p> <p>1) 学生ひとりひとりを大切に、「愛すること」「信じること」「揺るがないこと」を信念としている            2) 学生の笑顔を守る</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>学生が参加できる方法を探る。一方的に講義を行うのではなく双方向での講義を目指す。</p> <p style="text-align: right;">1.</p> <p>学生との接し方            ひとりの人間として尊敬し、尊重し、常に相手の立場に立ちながら、同じ目標を持つ同志として向き合う</p> <p>2. 授業の工夫</p> <p>1) 学生が主体的、前向きに授業に参加できるように双方向の授業を行っている。            2) 学生が看護への興味、関心を持てるように看護実践における事例を多く用いて看護へのイメージ作りを行っている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>1. 授業後にリフレクションペーパーを記入してもらい、次の授業の時に全員分コメントを入れて返却しており、相互の共通認識を高めることができた。</p> <p>2. リフレクションペーパーの内容から精神看護の対象である「人間」「こころ」に対する理解を深めることができたと考えられる。</p> <p>3. 授業評価アンケートでも平均以上の評価を得た</p> <p>4. 看護学科ベストティーチャー賞</p>			

## 5. 今後の目標

### 1. 短期目標

- 1) 学生が主体的に楽しく学べる授業の確立
- 2) 自分自身が成長していくための、研修や学会への参加

### 2. 長期目標

- 1) 学生ひとりひとりの個別性を大事にし、相手の立場に立ちながら、学生と一緒に成長できるための連携の取れた精神領域の確立
- ・短期的・長期的目標

### ・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

#### ・各種学生支援の内容

看護学科ボランティアサークル顧問

#### ・研修会や学会への参加状況

日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、日本看護研究学会

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	宮本雅子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>2023年度より本学看護学科にて、助産学・母性看護学の領域の授業および学生支援を担っている。学科の教育目的である「専門的知識と高度な技術、想像力、実践力、倫理性、協調性などを身につけた質の高い看護職者の育成」に向けて、ディプロマポリシーに基づいた授業展開は、学生の学習意欲や進度に教員は伴走しながら、常に学生を主軸に学習が進行する教育を心掛けている。</p> <p>2024年度は、助産師課程の授業「助産学概論」、「助産管理論」、「助産診断・技術学Ⅰ（妊娠期）」、「助産診断・技術学Ⅱ（分娩期）」、「助産診断・技術学演習Ⅰ・Ⅱ」、「助産学実習Ⅰ～Ⅳ」、および「母性看護学実習」を担当した。助産師課程は学生数が4名であり、少人数の双方向型授業や演習を実践した。学内での授業で行う助産技術の習得に向けた時間外の技術指導や、実習前の事例を基にしたシミュレーション学習により、臨地実習への導入を円滑に行えるよう支援した。また「卒業研究Ⅰ」の一部を担当し、卒業論文作成に向けた研究の基礎的な知識の理解と学生の個別テーマから研究計画立案までが実践できるよう講義とワークを行った。4年次生の卒業研究Ⅱでは助産師課程の学生2名のゼミを担当した。アドバイザーの学生は1～4年次生、過年度生、休学中の学生も含め13名を担当し、前期・後期の面談をとおして学習状況、日常生活状況、身体・心理面の把握を行い、学習に遅れのある学生や過年度に至る学生への個別学習支援を実施した。</p> <p>以下、担当科目；</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年次生：「助産学概論」、「助産診断・技術学Ⅰ」、「助産診断・技術学演習Ⅰ」</li> <li>・4年次生：「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」、「助産診断・技術学演習Ⅱ」、「助産管理論」、「統合看護実習」、「助産学実習Ⅰ～Ⅳ」、「母性看護学実習」</li> </ul> <p>大学院看護学研究科は、「育成看護学特論Ⅰ」の開講に合わせ、メンタルヘルスや子育て支援に関する論文をもとにディスカッションを行う授業を実施した。</p> <p>委員会は、看護学科「教務委員会」のメンバーとして、主に助産師課程の履修に関すること、卒業研究や学生の履修に関して関わった。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>自らの教育理念は「主軸が学生である」ことである。学生が看護学を学ぶ上で「看護の対象となる人が、何を思い、どうしていきたいのか」を主軸とし、最も望ましい看護を考えるプロセスと同じように、学生への教育は「学生が学習課題や生き方をどう思い、考え、どう学ぶのか」が主軸とすることだと考えている。少人数教育では、グループワークをとおして思考のプロセスを重視し、少人数グループや学生個々の考えから学びを深めることが課題である。その評価は、その場での学生の反応や表情、成果物を重要視している。「わからない」顔の反応を見逃さないこと、思考過程をどう進めるかを考え「わかる」顔になること、主体的に「こうしていく」ことが言語化して表出できることが望ましいと考える。自らが学生に主軸を置いて伴走することは、学生自身も他の学生や看護の対象者、臨地における専門職者や多職種と連携する上で、相手がどう考え何を求めているのかを知ろうとするような成長にもつながると考える。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>「助産学概論」、「助産管理論」で実施したことは、シラバス上の単元に関する書籍や学術論文、職能団体が発行する記事、新聞記事などを紹介し、できる限り最新の情報を提供することである。講義では提供した情報がどのように対象母子の助産ケアにつながりそうなのか実例を示して、助産についてグループワーク、もしくは個人ワークを行い発表する。他の学生の考え方や教員のコメントをもとに、「こうあるべき」と考えていたことが「望ましいことが何か、何が大切か」の気づきにつながるようフィードバックした。</p> <p>「助産診断・技術学」、「助産診断・技術学演習」では、妊娠期や分娩期の経過のプロセスを、模型やシミュレーション教材を使いながら、経過の節目ごとに止まって、何度も理解を促し、知識と技術、思考プロセスと実践がつながるよう教員側からの説明と、学生が体で体験できる工夫をしている。小刻みな「技術」の習得部分と、それらを対象母子に統合できるよう授業設計を組んでいる。</p> <p>「卒業研究Ⅰ」は多人数授業の講義形式であったが、研究計画書を初心者が作成するイメージを思考から説明し、学生個々が考えるテーマに基づく研究計画書を作成する個人ワークを行った。ワーク中に複数の教員でラウンドし個々の学生の進捗に合わせて指導する授業構成とした。</p>			

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

<b>4. 教育の成果</b>
<p>達成できたことは、助産師課程の学生が講義や演習の授業の後の助産学実習を行うにあたり、既習の学びを活用して助産実践に活かしたこと、そのために学習意欲を継続できたこと、学習意欲だけではなく専門職者になることに対する職業観への意識が向上したことである。実習中に学生自ら何度も自身の助産技術を振り返り、積み重ねるらせん型学習が行えたことが成長につながったと考える。</p> <p>達成できなかったことは、学習が遅延している個々の学生への学習支援へのアプローチである。アドバイザー担当の学生への、特に学習に問題がある学生の学習支援については心身双方が安定して学習に取り組めるように生活面談を交えながら支援したが、面談に来なかったり呼びかけへのレスポンスがなかったりと学習が進まず単位修得につながらなかったことがあった。</p>
<b>5. 今後の目標</b>
<p>学生への個々の手厚い教育が必要な時代になり、「看護師になりたい」気持ちをもって入学してきた学生も、「看護師になることを悩んでいる」学生も、ともに学ぶ中で教育者の「価値観やこうあるべき思考」が個々の学生の向く方向とは乖離が生じると考える。しかし、学生にとっての「自分がどう向いていくか」が定まっていない学生と伴走するにはどうすればよいか課題であり、本当に学生を主軸とする教育とは何かをさらに深める必要がある。できれば退学者を減らしていけるように、個々の学生への教育的支援を行う目標を継続し、次年度はもっと学生の「気持ち」を表出できるような関りから、学生にとっての「学習目標」が考えられるようなプロセスが必要である。双方向での関りを深めて学生が「こうしていく」に自信がもてるようになることを目標としている。</p>
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)</b>

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	井上 葉子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 令和6年度は以下の授業を担当し、学部生(保健医療学部看護学科)と大学院生(看護学研究科)の教育を行った。</p> <p>(2年次生)公衆衛生看護学Ⅰ(地域活動), 公衆衛生看護学Ⅱ(学校保健)</p> <p>(3年次生)公衆衛生看護学方法論Ⅱ(健康課題の発見と事業化), 公衆衛生看護学Ⅱ(学校保健)</p> <p>(4年次生)公衆衛生看護活動展開演習, 地域包括ケア論, 公衆衛生看護学実習Ⅰ(地域活動), 公衆衛生看護学実習Ⅱ(学校保健), 公衆衛生看護学実習Ⅲ(産業保健), 卒業研究Ⅱ</p> <p>(大学院)在宅看護学特論Ⅳ(地域包括支援)</p> <p>2. 大学正規科目ではないが、4年生を対象にした看護師国家試験領域別対策講座と保健師国家試験対策講座での講義を担当し、国家試験合格に向けた教育を行った。</p> <p>3. アドバイザーとして、1年次生3名、2年次生4名、3年次生2名、4年次生2名を担当し、学習や学生生活に関する支援を行った。また、看護師国家試験・保健師国家試験の受験対策のためのアドバイザーとして、看護師・保健師課程4年生11名を担当し、国家試験合格のための学習や受験対策に関する支援を行った。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>基本的な方針として、学びの主体は学生であり、教え込むのではなく学生自身が考え、気づき、自分なりの答えを導き出せることを目指して教育に携わっている。そのためには、考える上でのヒントや道筋は提示しても、答えは先に出さず、学生自身が答えを出すまで待つ時間を確保するなど学生の主体性を育みながら学生自らが成長できる機会を確保することに努めている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>1. 学生との接し方 学生と向き合う時間を大切にし、授業のみでなく、構内などで出会ったときの些細な会話も、学びにつながり、なにかの動機づけになる可能性があると考え、大切にしている。</p> <p>2. 授業の工夫 授業においては各授業の目標を提示し、この授業での内容と目指すべきゴールはどこかを明示している。また、授業における学生のような学びの内容を確認するために、授業終了時には「授業振り返りシート」で学生の学びや感想をとらえ、授業を通しての学習の成果を振り返る時間を取るようにしている。また授業振り返りシートに記載された疑問や質問には授業内で必ず答えるようにしている。 授業方法では自身で制作した動画教材等を用いて学生が看護の実際について具体的なイメージがもてるような工夫を行っている。</p> <p>3. FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 学内のFD研修に参考するとともに保健師教育に関する研修会に年1~2回参加している。令和6年度は、全国保健師教育機関協議会主催の令和6年度第1回東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会・定例会議「保健師の人材確保に関する学生のキャリア支援」に参加した。</p> <p>4. 自らの専門分野の成長 看護師・保健師による地域活動に関する共同研究に取り組み、研究の成果を公衆衛生看護学の教育に盛り込むようにしている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>教育の成果として、最も顕著と感じているのは、卒業生が保健師として行政機関で活躍をしていることである。保健師養成に携わる教員として、まずこの部分は成果としてあげたい。毎年、複数が保健師として就職しており、保健師として就職しなかった学生も、将来保健師として働きたいという思いを抱く卒業生が多く、卒業後に保健師での就職に関する相談を受ける事も多い。</p>			

## 5. 今後の目標

### 1. 短期的目標

大学において看護師・保健師として活躍できる人材を育成することである。そして、看護師・保健師となった卒業生が将来にわたって自らの知識、スキルを磨き続けるために主体的に学ぶ意味と姿勢を学生の内から、根付かせて行きたい。そのためには、自身の教育活動、研究活動について学生に伝えることはもちろんだが、学会発表、論文掲載など社会に情報発信することが重要であると考え。

### 2. 長期的目標

保健師の魅力とその専門性について情報発信し、保健師を目指す人材を確保することである。そして現場で活躍する保健師の活動を支援するための技術、システム等の開発や現任教育に役立つ教材等の開発など、保健師の実践力を向上させるための教育活動・研究活動を行いたい

### ・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

#### 添付資料

- ・シラバス「公衆衛生看護学診断演習」
- ・授業アンケート「公衆衛生看護学診断演習」

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	4	2	選択
担当教員			
井上葉子 高橋晶 井戸麻裕			
木曜・1限			
添付ファイル			

授業の目標・概要	公衆衛生看護診断モデルによって、集団を対象とした活動の前提となる地域診断について学ぶ。地域診断の実際として、健康診査や健康相談などの実績を既存資料から把握したり、地区踏査による自然環境、人々の暮らしや保健行動・価値観など、情報を多角的方法で把握したり、既習の公衆衛生学や疫学、統計学の手法を駆使し、地域の全体像を把握する。地域・学校・産業の特性を把握し、地域住民の健康課題を明確にするため、既存の資料や統計資料を分析した地域診断と活動課題を共有する。
学習の到達目標	1. 既存資料、地区踏査等で得た地域や市町村、学校、事業所の情報をアセスメントし、対象（地域、集団、組織）の健康課題を抽出する準備を行う。 2. 対象（地域、集団、組織）の健康課題を抽出するための不足情報をあげる。 3. 公衆衛生看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに向けての公衆衛生看護学技術（健康教育等）を習得する。
授業方法・形式	演習
授業計画	<p>第1回 4月11日（木）1限 ガイダンス（担当：井上葉子・高橋晶・井戸麻裕） 保健師課程ガイダンス ・教員あいさつ ・保健師模擬試験（ほけもし）について（10月～12月の間で3回実施予定） ・就職について 演習ガイダンス ・授業到達目標 ・担当教員の発表 ・演習と実習の関係および流れについて ・演習の提出物について ・グループリーダーの選出 ・地域の情報収集方法、アセスメントについて</p> <p>第2-4回 4月11日（木）2～4限 地域診断演習①（担当：井上葉子・高橋晶・井戸麻裕） 実習グループ単位で実習市町村の地域診断を行う。 グループ内での役割を決め、グループ単位で演習を行う。 ※随時、各担当教員の指導を受けながら進めること。 「地区踏査行動計画」（様式9）作成</p> <p>第5-8回 4月18日（木）1～4限 地域診断演習②（担当：井上葉子・高橋晶・井戸麻裕） 実習グループ単位で実習市町村の地域診断を行う。 地区踏査演習 随時、各担当教員の指導を受けながら進めること</p> <p>第9-12回 4月25日（木）1～4限 地域診断演習③（担当：井上葉子・高橋晶） 実習グループ単位で実習市町村の地域診断を行う。 市町村の地域診断より、実習での健康教育のテーマを決めて、「健康教育企画書」を作成 担当教員に1回目「〇〇市町の情報とアセスメント」「健康教育企画書」をメールで提出。 （その後、適宜担当教員から指導を受けて修正し、演習での最終版は指定期日までに担当教員にデータで提出）</p> <p>第13-16回 5月2日（木）1～4限 地域診断演習④（担当：井上葉子・高橋晶） 実習グループ単位で実習市町村の地域診断を行う。 健康教育演習① 「健康教育企画書」修正 「健康教育指導案」作成</p> <p>第17-21回 5月9日（木）1～5限 産業保健診断演習（担当：井上葉子・井戸麻裕） 実習グループ単位で産業保健診断演習を行う。 17：50 出席確認 担当教員に提出する。 「〇〇事業所の情報とアセスメント」様式10、「グループでの不足情報」「不足情報」をデータで提出する。 （その後 担当教員の指導を受けて修正し、最終版は実習の前の週の月曜12：00までに作成の上、担当教員にデータで提出する）</p> <p>第22-25回 5月16日（木）1～4限 地域診断演習⑤（担当：井上葉子・高橋晶） 実習グループ単位で実習市町村の地域診断を行う。 健康教育演習② 「健康教育企画書」修正 「健康教育指導案」作成</p> <p>第26回 5月23日（木）1限 地域診断演習⑥（担当：井上葉子・高橋晶） 5月30日（木）の学校保健演習（歯科健康診断）のオリエンテーション  演習最終版「〇〇市町の情報とアセスメント」「健康教育企画書」「健康教育指導案」（各紙面とデータ）、「不足情報」（紙面）を期日までに担当教員に提出する。 ※提出の後も担当教員の指導を受けて修正し、データ最終版は実習の前の週の月曜12：00までに担当教員にデータで提出する）各自で保健だより作成に関する演習を行う。 1. 実習担当教員から提示されたテーマと対象での保健だよりの企画書を作成し実習担当教員に提出する。 （企画書内容について教員のOKが出たら） 2. 指示された様式で保健だよりを作成し、期日までに実習担当教員に提出する。</p>

	<p>第27-28 5月30日(木) 1~2限 学校保健演習①(担当:井上葉子・高橋晶) 「健康診断(歯科健診)演習」 1.実習校での健康診断の様子を観察し、健康診断を安全に円滑に進めるための教職員の役割の実際を学ぶ。 2.健康診断(歯科健診)の実際を体験する。</p> <p>第29-30回 5月30日(木) 3~4限 学校保健演習②(担当:井上葉子・高橋晶) 各自で実習校に合わせた保健だより作成を行う。 1.実習担当教員から提示されたテーマと対象での保健だよりの企画書を作成し実習担当教員に提出する。 (企画書内容について教員のOKが出たら) 2.指示された様式で保健だよりを作成し、期日までに実習担当教員に提出する。</p>
成績評価の基準	<p>1 課題・提出物90%・出席・演習参加状況10% 【グループ課題と提出物】 2 ○市町の情報とアセスメント20%、健康教育企画書・健康教育指導案20%、事業所の情報とアセスメント10% 【個人課題と提出物】 健康診断(歯科健康診断)後のミニレポート10%、保健だより10%、800字レポート「実習市町村の地域アセスメントと健康課題について」20%</p>
課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法	<p>地域診断、産業保健診断ともに、担当教員が方向性を示し、学生のアセスメントを尊重しながら、細部にわたり修正や助言を通して学生の学修支援を行うので、分からない事柄は放置せず自ら教員に尋ねるとともに、グループ間での共有を行い、互いに理解を深めあうこと。 保健だよりは担当教員の助言をもとに、実習に向けてクオリティの高いものに仕上げること。</p>
準備学習・復習及び授業時間外の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関連科目(公衆衛生看護学概論・公衆衛生看護学ⅠⅡⅢ・公衆衛生看護学方法論ⅠⅡ・疫学・保健統計)の復習を行ってから授業に臨む。(計5時間程)</li> <li>・情報収集は、保健所事業概況・eスタット(政府統計の総合窓口)・各ホームページ・パンフレット類・地区踏査・学校法人奈良学園のホームページ(情報公開:各年度報告書)等より総合的に入手する。(計25時間程)</li> <li>・各実習施設の場所や交通手段を各自で調べておく。</li> <li>・実習期間中におこなわれる事業について、あらかじめ情報を得ておく必要があるものは把握して入手しておく。</li> <li>・授業後の指導案の修正(15時間)</li> </ul>
履修上のアドバイス及び留意点	<p>・臨地実習での実践活動につながるよう、各自が主体性をもってグループワークを進めること。</p>
教材・教科書	<p>標準保健師講座1:公衆衛生看護学概論 医学書院 標準保健師講座2:公衆衛生看護技術 医学書院 標準保健師講座3:対象別公衆衛生看護活動 医学書院 国民衛生の動向 厚生労働統計協会</p>
参考書	<p>地域看護診断—技法と実際—, 金川克子編, 東京大学出版会 公衆衛生看護学. jp 第5版, インターメディカル 産業看護アセスメントツール, 河野啓子, 法研 主体的に学ぶ養護実習ガイドブック, 岡本啓子編, ジアース教育新社 新版養護実習 第4版, 杉浦守邦監修, 東山書房</p>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL(課題解決型学習)</li> <li>□反転授業(知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>□プレゼンテーション</li> <li>■実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>実習に向けた健康教育の演習では、地域の健康課題に応じた健康教育を学生が企画、立案をし、各グループで教育媒体を作成します。学校保健演習では実習校での健康診断の実践と保健だよりの作成を行います。</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>■自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>■他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>■他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>担当教員全員が、行政、医療機関、健診機関、教育機関等のいずれかでの実務経験あり</p>

# 2024年度

# 授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2024年度

木曜日1時限

井上 葉子

公衆衛生看護学診断演習

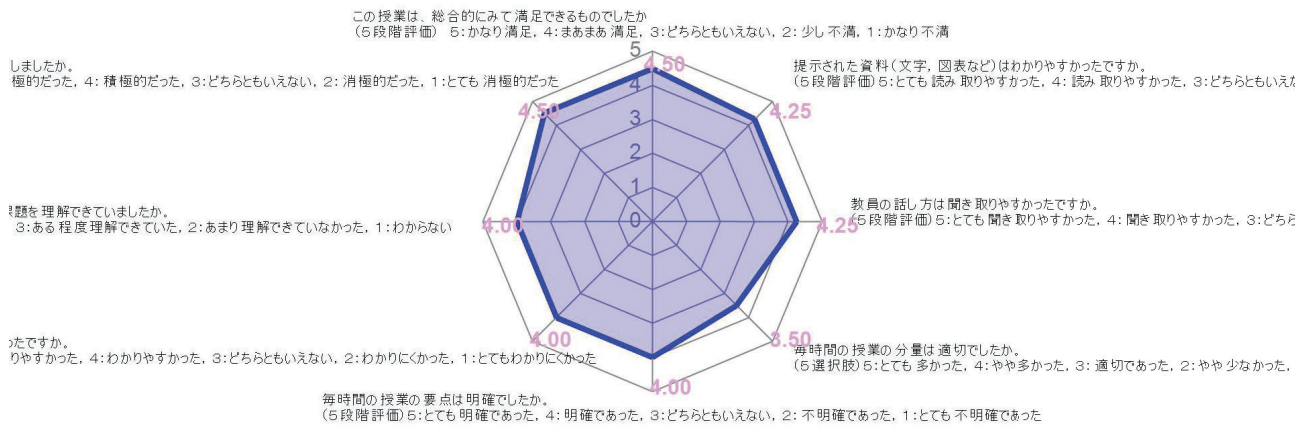
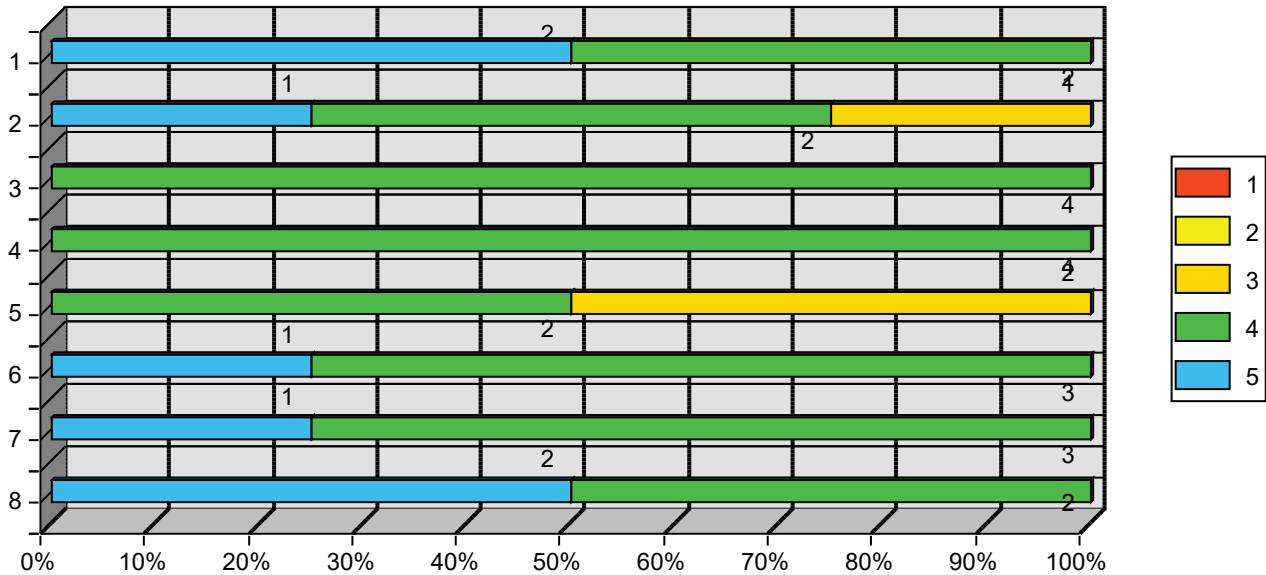
アンケート総数

4 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

- この授業に積極的に参加しましたか。
- この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
- 教員の説明はわかりやすかったですか。
- 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
- 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
- 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
- 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
- この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	2	2	0	0	0	4.5
集計	1	2	1	0	0	4
集計	0	4	0	0	0	4
集計	0	4	0	0	0	4
集計	0	2	2	0	0	3.5
集計	1	3	0	0	0	4.25
集計	1	3	0	0	0	4.25
集計	2	2	0	0	0	4.5



# 2024年度 授業評価アンケート(集計表)

開講年度 2024年度

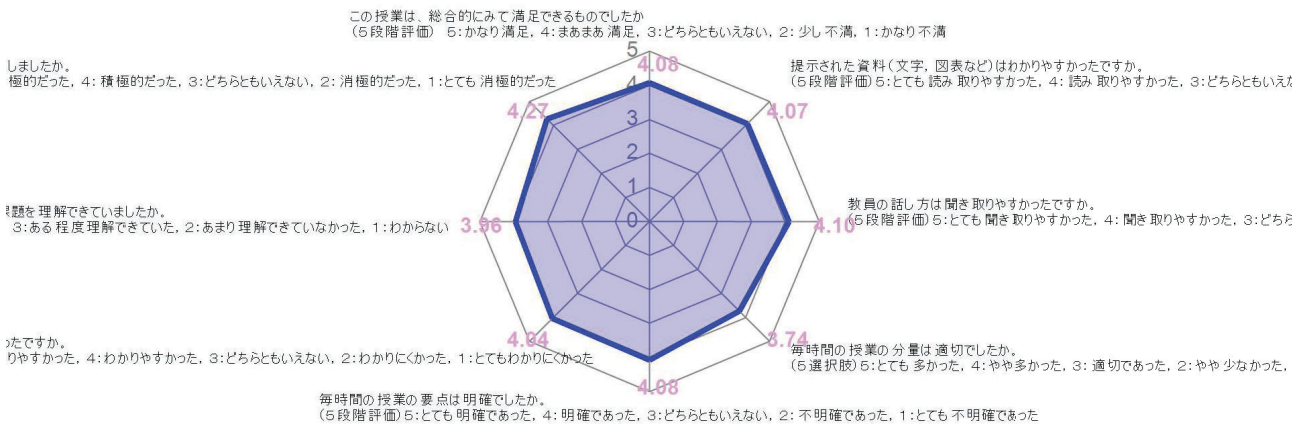
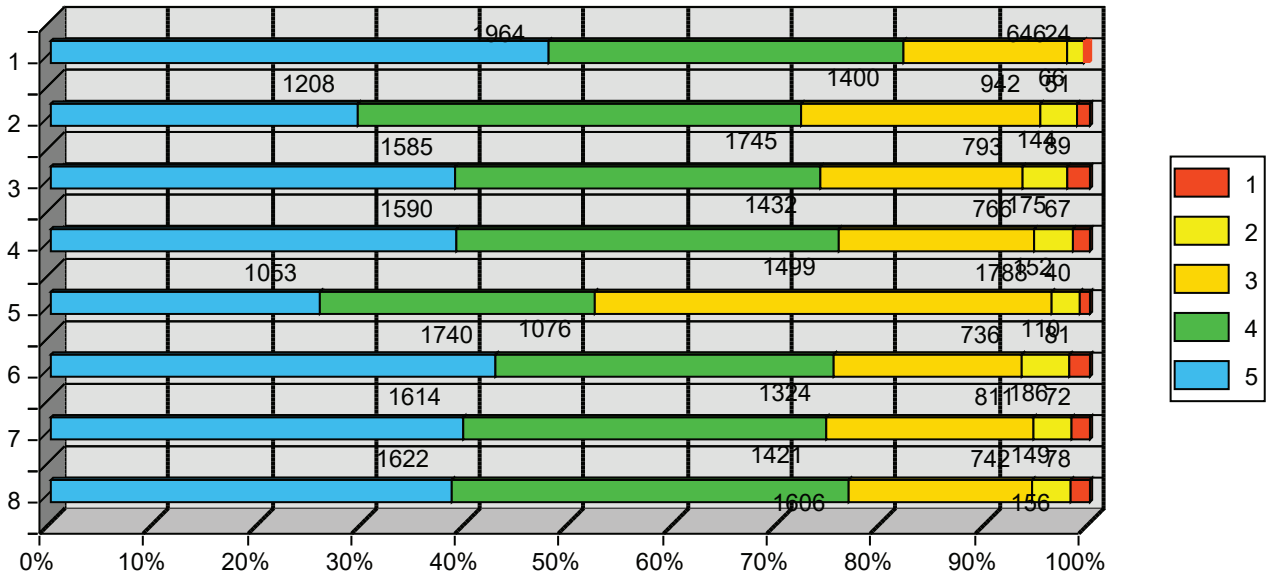
全体結果

アンケート総数 4204 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加しましたか。
2. この授業で取り組むべき事前事後課題を理解できていましたか。
3. 教員の説明はわかりやすかったですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確でしたか。
5. 毎時間の授業の分量は適切でしたか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすかったですか。
7. 提示された資料(文字, 図表など)はわかりやすかったですか。
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
1. 集計	1964	1400	646	66	24	4.27
2. 集計	1208	1745	942	144	51	3.96
3. 集計	1585	1432	793	175	89	4.04
4. 集計	1590	1499	766	152	67	4.08
5. 集計	1053	1076	1788	110	40	3.74
6. 集計	1740	1324	736	186	81	4.1
7. 集計	1614	1421	811	149	72	4.07
8. 集計	1622	1606	742	156	78	4.08



学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	高橋 晶
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 保健医療学看護学科における教育  保健医療学部看護学科の講師として地域在宅看護学領域の講義、実習を担当した1年目となる令和6年度では、主に在宅看護学領域の講義、演習、実習を円滑に進めるために、領域教員、非常勤教員と協議、調整し準備を行った。非常勤教員が担当する科目では、講義、演習の目的とその達成のために必要な学習項目の確認を行い、学生の学修到達を目指した。また、地域在宅看護の対象は、あらゆる場所の、あらゆる年代の、あらゆる健康状態の方々である。これまでに修めてきた知識を、対象の状況、背景に合わせた、そして生活者として捉え上で、看護展開ができることを目標に、講義構成を考え、実践した。令和6年度に担当した科目は以下のとおりである。</p> <p>2年次生：地域在宅看護援助論  3年次生：地域在宅看護援助論演習Ⅰ  地域在宅看護学実習  公衆衛生看護学方法論Ⅰ  4年次生：統合看護実習  公衆衛生看護学実習Ⅰ  公衆衛生看護学実習Ⅱ  卒業研究Ⅱ</p> <p>2. 各種学生支援  学生生活委員会、看護学科実習WG、アドバイザー学生支援</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>1. 自らの教育理念と目的  学びの主体は学生であるため、主体的に学べる環境を学生個々に合わせて作り支援する。</p> <p>2) 価値観・信念  「看護職としての『後輩』となる学生を大切に」を信念に、時には教員と学生という枠から離れて看護を語るなど、同じ目線を意識することを心がけている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>授業の工夫(授業の方法, 内容等)  【援助論演習】在宅人工呼吸器演習  ・学生がその場面をイメージできることを心がけている。  ・在宅人工呼吸器装着者への看護、家族介護者への支援(アラーム対応と家族の不安の軽減)で、呼吸器のアラーム音を実際に学生に聞いてもらう。</p> <p>・「家族の不安」を実際に感じてもらうと同時に、これまでの演習で、「思っていたよりアラーム音にびっくりしなかった」とのコメントをもらい、次年度はそのような学生もいることをふまえ講義構成を考える。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実物の機器を使用することでイメージでき、在宅での人工呼吸器看護を考えられたことを表す表現が、ワークシートから得られた。</li> <li>・グループワークの学生配置人数が7～8名であったため、グループ全員の意見まとめに困難を要した。</li> </ul>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>短期目標：  看護を身近に感じ、考えられるよう事例等を用い、容易にイメージできる講義、演習内容の実践</p> <p>長期目標：  自らで考え、自らで解決していくという学生主体で講義に参加し、学びを得られる講義となるようなさらなる工夫</p>			

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	高橋 寿奈
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 保健医療学部看護学科における教育</p> <p>1) 看護実践につなげるための教育方法</p> <p>必修科目の根幹をなす科目の一つである、成人老年看護学Ⅰ・成人老年看護学援助論演習Ⅰにおける教育計画立案・教育内容のマネジメントを行っている。また成人老年看護学実習の、実習施設の教育内容・指導方法の調整も担当病院で行っている。成人老年看護学援助論演習では、施設で暮らす高齢者の理解として学外授業を企画し授業施設と教育内容・指導方法の調整を行った。</p> <p>2025年度は、以下の必須科目をオムニパスで担当し看護学教育を実施した。</p> <p>2年次生：成人老年看護学Ⅰ</p> <p>3年次生：成人老年看護学援助論演習Ⅰ・成人老年看護学援助論演習Ⅱ 成人老年看護学実習Ⅰ～Ⅳ</p> <p>4年次生：統合看護学実習（成人老年看護学領域） 卒業研究Ⅱ</p> <p>2. アドバイザーとして、1年次生4名、2年次生4名、3年次生4名、4年次生3名 を担当し、学習や学生生活に関する支援を行った。生活態度面も含め指導が必要な学生には、親御さんにも密に連絡を取りながら十分に学習環境が整い学習に集中できるように支援を行った。</p> <p>3. 広報委員として、オープンキャンパスやなどの学事行事に参画し本学の魅力をより強く広範囲に発信できるようにしている。</p> <p>4. 国試対策委員として、老年看護学の集中講座を行っている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>学生が、対象者の背景や生き方をとらえ、相手の立場に立って考え学生の独自性を発揮することができるような力をもった人に成長できることを目指して、教育に携わっている。また、障害や病いに苦しみながらもたくましく最後までその人らしく生活するということはどういうことなのか常に考え、そこを支援できる看護者を育てたいと考えている。</p> <p>そのために大切にしていることは、自ら考えた内容を確認し、尊重しながら他の学生や他の医療者とも協働しながら看護できるように、実施できるようにチャレンジを応援している。個々の学生の特性をできるだけ見るようにし、その学生のよいところを伸ばせるように関わるようにしている。正直に素直に患者に向き合えるように、創意工夫しながら肯定的に関わるようにしている。また、昨今増加傾向にある学習に支援が必要な学生に対しても、個々の学生の特徴と捉えあきめなくともよい支援を工夫するように心掛けている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			

## 1) 学生との接し方

学生が頭でわかるだけでなく得心できるようにしていきたいと考える。そのため「それはどうしてそう考えたのか」などの学生の意見を聞く機会を持つように心がけている。ほかの学生の意見も一緒に確認し、一緒に考えるというスタンスをとるようにしている。また、医療者として事故につながりそうなことや人間関係に問題となりそうなことを行ってしまう時は、曖昧にはせずその理由をわかりやすく説明し、納得して行動修正できるように伝えるようにしている。

## 2) 授業の工夫

30回の授業では、昨今の行政や社会的な疾患なども考慮し、時系列や一般的な内容からより専門的な内容へとつながるように授業を配置している。その時には、実際の患者との関わりも意識できるような内容とし、基礎的な科目から発展している内容や、他の領域の看護と違胃についても、対比しながら説明しイメージできるように説明している。また自分のこととして考えられるように「自分ならどうか」と振り返りながら学生が考え学べるように心がけている。

90分間の座学を行うことが難しい学生も多数おり、20分間に1回程度授業展開を行い、集中力が途切れないように工夫している。また、テキストから読み取る、自分の意見を表現する、ということが難しい学生も多いことを鑑みて、要点を確認するような内容の資料作成を課題提出としたり、板書を実際に行ってもらい意見の発表や内容説明をさせ、自他の意見を聞き取ったり調べて読み取ったりする機会を増やしている。学生の創意工夫を伸ばすため、新しい考えや解釈などがあれば、根拠を示しながら発展として考えられるようにほかの学生へ紹介し、「より良い看護を行っていくにはどうすればいいのか」や「看護には多数の正解がある」という面も理解してもらえるように工夫している。そして、「実際の実務ではどうするか」や、「臨床の場では実際にどうされているのか」を教示することでより具体的に学生が興味をもって援助を考えることができるようにした。

認知症や様々な場所での高齢者の暮らしの理解を促すために学外授業を企画し、奈良県内の施設を利用し、実際に施設での高齢者や認知症の方との関わりを全員が経験できるようにした。また、施設の特徴やそこで尊重されている看護や介護、根拠法の学びの差ができないように、お互いに施設の特徴や学んだ内容についてプレゼンテーションを行い、学びを深めるようにした。

集中授業の実習では、既習学習の内容を想起できるように授業資料の活用を促し、達成できたことは記録に直接記入もし、しっかり伝えるようにしている。また事故を誘発するのではないかなというようなことは、実習指導者とも協議し調整するようにしている。

成人老年看護学援助論では、成人期の授業内容を受けたのちさらにそこから老年期になるとどう変化するのか、イメージしやすいように授業構成をした。実際に授業の中で学生も参加したロールプレイを行うことで対象患者やその家族の思いを反映させた看護について考えるように促した。また自身の考えを言葉にし表現したり、人に伝える機会を多くもつことができるように工夫した。

### 3) FD/SD活動にかかわる内外の研修会への参加

学内のFD研修会への参加、奈良県看護協会教員研修、認知症回想療法継続研修に参加し新たな知識や情報交換を行うようにしている。他大学との看護系大学教員向けプログラムにも継続参加し、看護教育力を向上できるようにし、学生へも還元できるように努力している。

### 4) 自らの専門分野の成長

看護教育にかかわる共同研究と、地域の看護師と一緒に認知症関連の研究に取り組み、授業へ反映させることができるように努力している。成人老年看護学分野になってからは、地域での救急活動の指導などに参画し、地域貢献しながらも現在問題となっている情報を収集しながら活動し自己鍛錬に務めている。

## 4. 教育の成果

FD・SD研修会や看護協会での学びの内容をいかし、学生の現在の特性を考慮しながら、学習方法を工夫した。

学内の授業では、様々な形式で自身の考えや学びを整理しまとめ共有をできた。学生が二極化していることも踏まえ、学生の理解の程度に合わせて授業内容を調整し、必要時には動画なども使用しイメージできるようにすることで理解を得ることができていると考える。しかし、どうしても学びが遅れがちな学生の復習や指導体制を再考し、遅れたときにリカバリーできるような授業体制、時間調整を考える必要ではないかと考えている。

集中講義の実習では、おおむね目標達成できている。

## 5. 今後の目標

### 1.短期目標

- 1) 基本的な知識の想起をし、すべての講義がつながり体系だって学修できるように学生の終業年限やこれまでの授業内容について、既習授業の教員とも連携をこれまで通り取りながら学修できるように学んだことを生かして実習や、就労も視野にいれ授業設計していく。
- 2) 成人老年看護学実習Ⅳの科目責任者として、人生の最終段階の患者に対する生ききることを支える支援についての集中講座の内容を充実させる。
- 3) 既存の学習方法以外の学習に方法についても創意工夫し、学生が学びやすくなるように工夫することを続ける。

### 2.長期目標

2022年度カリキュラム開始に伴い、当校らしい成人老年看護学領域のカリキュラムの特性とその教育効果を明らかにする。そしてカリキュラム全体の教育効果と照らし合わせ、カリキュラム改善へ向け取り組めるようにする。

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

## 成人老年看護援助論 I

2年次生必修科目 授業日時：月曜：3～4限目 学年開講  
 科目担当者：高橋寿奈 岩本淳子 溝口みちる 浅野千晶  
 座席指定あり パスコード入力・提出物等、併用した出席確認で出席とする  
 終講試験あり 再試験あり ※試験70%授業提出物等30%で総合的に評価する

### 目標

1. 重篤な健康破綻により生命の危機状態に陥る健康障害と治療が成人・老年期にある人とその家族に及ぼす影響を説明できる。
2. 手術療法における生体反応と合併症のリスクを説明できる。
3. 機能障害に応じた亜急性期の看護について説明できる。
4. 手術療法を受けた成人及び老年期にある人と家族の意向を尊重した退院支援・退院調整について説明できる。
5. 生命の危機の瀕している急性・重症患者の全人的なケアの意味を説明できる。
6. 急性・重症患者と家族の健康回復を支える多職種連携と看護の役割を説明できる

回数	日時	授業内容	担当
第1回	9/22 3限	授業ガイダンス 重篤な健康破綻により生命の危機状態に陥る健康障害と治療、生命の危機状態に陥る人と家族の特徴、発達課題への影響	高橋
第2回	9/22 4限	重篤な健康破綻により生命の危機状態に陥った人の看護に重要な概念 身体の恒常性を維持する仕組み(ホメオスタシス)、外科侵襲と生体反応がおこる仕組みと看護	岩本
第3回	9/29 3限	重篤な健康破綻により生命の危機状態に陥った人の看護に重要な概念 麻酔と手術、ムーアの分類と看護、術後合併症のリスク	浅野
第4回	9/29 4限	術前の身体・心理・社会的側面のアセスメント	浅野
第5回	10/6 3限	高齢者が手術を受ける場合の特徴と留意点	高橋
第6回	10/6 4限	術前準備と看護	高橋
第7回	10/13 3限 祝日開講日	手術中の看護	高橋
第8回	10/13 4限 祝日開講日	手術直後の看護	高橋
第9回	10/20 3限	術後障害期(異化期)の看護	浅野
第10回	10/20 4限	術後亜急性期の看護	浅野
第11回	10/27 3限	消化機能の手術を受ける成人と家族の看護看護(胃・大腸)	溝口
第12回	10/27 4限	消化機能の手術を受ける成人と家族の看護看護(胃・大腸)	溝口
第13回	11/3 3限 祝日開校日	排泄機能の手術を受ける患者・家族の看護(腎・尿路)	溝口

第14回	11/3 4限 祝日開校日	性腺機能の手術を受ける高齢者・家族の看護(腎・尿路)	溝口
第15回	11/10 3限	頭頸部の手術を受ける患者・家族の看護	高橋
第16回	11/10 4限	脳神経系の手術を受ける患者・家族の看護	高橋
第17回	11/17 3限	関節・運動器系の手術を受ける患者(高齢者)・家族の看護(大腿骨や膝関節の手術と看護)	高橋
第18回	11/17 4限	関節・運動器系の手術を受け患者(高齢者)・家族の看護(大腿骨や膝関節の手術と看護)	高橋
第19回	11/24 3限 祝日開校日	呼吸機能の手術を受ける高齢者と家族の看護(肺)	高橋
第20回	11/24 4限 祝日開校日	循環機能の手術を受ける高齢者と家族の看護(肺)	高橋
第21回	12/1 3限	侵襲のある検査治療を受ける患者の看護:心臓カテーテル検査、ERCP	高橋
第22回	12/1 4限	急変時の看護:急変の徴候と発見時の処置・看護	岩本
第23回	12/4 5限	災害時の看護①災害時の医療体制、国際支援	溝口
第24回	12/5 1限	災害時の看護②災害サイクル、急性期の看護活動	溝口
第25回	12/8 3限	救急看護①救急医療体制、医療情報システム、法的・倫理的側面	外部講師
第26回	12/8 4限	救急看護②観察とアセスメントのポイント	外部講師
第27回	12/15 3限	救急看護③一次・二次救命処置と看護	外部講師
第28回	12/15 4限	集中治療を受ける患者の看護①重症患者と家族の理解	外部講師
第29回	1/26 3限	集中治療を受ける患者の看護②アラームの意味とアラームが鳴った時の対応	外部講師
第30回	1/26 4限	集中治療を受ける患者の看護②人工呼吸器を使用している患者の全身管理と看護	外部講師

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	西出 順子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 保健医療学部看護学科における教育 精神看護学概論(2年次前期科目, 必修, 履修生89名)、精神看護援助論(2年次後期科目, 必修, 履修生92名)、精神看護援助論演習(3年次前期科目, 必修, 履修生79名)、精神看護学実習(3年次後期科目, 必修, 履修生)、統合看護学実習(4年次前期, 必修, 担当13名)、卒業研究Ⅱ(4年次通年, 必修, 担当3名)</p> <p>2. 大学院看護学研究科における教育 精神看護学特論Ⅰ(日本の精神医療のノーマライゼーションの実際、精神障害者と家族から見た地域精神医療サービスの制度と課題)、精神看護学特論Ⅱ(心理機能評価、身体機能評価、発達課題評価)</p> <p>3. 学生のアドバイザーとして、1年次生2名、2年次生2名、3年次生2名、4年次以上5名を担当した。</p> <p>4. 教務部会メンバーとして、教務に関する課題を検討実施した。</p> <p>5. 入学前教育企画運営に携わった。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>看護の対象に積極的に関心を寄せ、対象を理解する意図的なコミュニケーションをとおした共感的理解のもと、理論を活用し一旦ニュートラルな思考に戻り、対象の意思や考えを第一に尊重することを基盤にした関わりの中で、対象が生きることへのイニシアティブを取り戻し、人生を豊かにしていけるようサポートするケア実践者を育成する。また、看護を学び、実習での看護を実践する中で、自身の持てる力と課題を認識し乗り越えるよう努力し続けるための導き手となれるよう研鑽を積む。</p> <p>学生と教員の関係性の取り方も患者—看護師関係の模擬体験に通ずると考える。学生が脅かされず意思や考えを尊重され、学ぶことに主導権を持てる体験を大切にする。その動機付けとなるきっかけづくりと、押しつけがましくないちょっとした後押しができること、学業が芳しくない学生には面接し、学業が滞っている理由を把握しアセスメントした上で対応を考慮していく。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>&lt;学部&gt; 目に見えない精神の機能や心理をイメージし、理解していくツールとして複数の理論の概念枠組みを使用する。対象の心理や行動を理解する概念枠組みとして、フロイトの局所論・構造論・発達論、自我防衛機制、エリクソンの発達論、前田重治の適応論、また人との関係性からみる対象理解として、コフォートの理論、土居建郎の甘えの理論エリクソンの発達論等をできうる限り具体的に例を挙げ、時にはアニメキャラクター等と関連付けて解説し、関心を喚起するように心がけている。これらの概念枠組みは精神看護学概論・精神看護援助論・精神看護学演習で状況を変えて繰り返し活用することを通し、臨地実習に備えている。</p> <p>精神看護学のアップデートについては、社会で生じている精神障害関連の問題を挙げて考えることや、医学書院の雑誌「精神看護」と精神看護関連の研究を取り入れ最新のケア情報を紹介している。</p>			

精神看護学概論・精神看護援助論は主に講義形式で進めているが、精神障害や疾患の理解の上に立ったケアというよりも、精神機能のコントロールが難しくなり生活者として生きづらさを抱える人という考え方を大切に、対象理解と理解の上に立ったコミュニケーションの重要性を事例とともに説明する。ツールとして、ドキュメンタリー映画の一部を用い、当事者の語りを大切にする。普通では理解しづらい幻覚妄想については『幻聴・妄想かるた』を用い、学生自身の体験と近しさの実感を通して、精神障害者に対する特別意識の軽減をはかる。また、理解の成果と疑問を確認するために、授業ごとにコメントシートを提出してもらい、学生の関心の向くところや理解力、まとめる能力を把握している。疑問については、次回の授業のはじめに答えている。コメントシートは教員からもコメントを入れて返却しているが、コメントの内容は主に助言や感想とし、学生の気持ちを低下させようなネガティブな内容は記述しないように心がけている。

精神看護援助論演習においては、教員の模範的解説に続き、グループワークで看護過程をすすめている。看護の対象の精神状態のアセスメントを強化すべく、事例の状態と精神状態を示す用語とをつなげ、生活にどのように影響するのかまでの解説をグループワークの内容の質に応じて入れた。グループワークの際に、教員がグループ間を回り、学生がグループに参加できるようにファシリテートの役割を担っている。成果物に対しては、不足する内容については、自己学習するポイントを提示しながら全てにコメントを入れて返却している。臨地実習については、学生のモチベーションを低下させないように、学生の気づきとセンスを尊重し、体験を通じた振り返りを大事にする。

アドバイザー面接・他個人面接では、状況に応じてアドバイスモード、カウンセリングモード、教育的モードを使い分けて対応する。

<大学院>

最新の研究論文や理論を活用し、時には学生にも調べてもらい、学生の臨床体験や臨床活動と関連付けながら対話方式ですすめる。

実習に関しては、学生に染み付いた特性に苦戦しながらも、イメージ的には氷を解かすように大学院レベルの理論を使いこなした対象理解と治療的コミュニケーションを意識した関わりができるように、また、上級ケア実習を終えることには、社会的関係も含めて多角的に支援できるように伴走的関わりに徹する。

#### 4. 教育の成果

- ①こころや精神の機能については振り返りシートから関心が寄せられているのがわかる
- ②ただし、フロイトや精神の機能の理論を使えているかは、実習においては受身的であり、活用は如実に症状と関連付けができるケースにとどまっている。
- ③今年度から精神看護援助論演習にCVPPPや身体拘束体験の演習を加えた。その分、アセスメントに関する演習時間は削減を余儀なくされた。実習で複数の学生に聞いたところ、アセスメントに関する授業は回数は少なくとも十分という声がほとんどであり、実習においてもアセスメント能力はむしろ向上していると思われた。
- ④講義資料のパワーポイントの盛り込みすぎに関しては、内容を見直し、授業評価においてもポイントは上昇した。

#### 5. 今後の目標

個別色の強い精神看護の対象に関心を寄せ、ケアのためのモチベーションを向上させる。  
個別色の強い対象を理解するには、理論を使って読み解く術と実際の関わりの中で感じ取る理解が必要である。授業では理論を理解し活用するためにアクティブラーニング的な授業内容を工夫する。  
実習においては、苦しみよりも安全・安心・楽しい気持ちの中で、思考と実行力を存分に発揮できる環境を整える。

・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

- ・2025年7月27日(日) 兵庫県臨床心理士会 研修会「地域臨床における多職種協働」
- ・2025年11月23日(日) 第2回 トラムマインフォームドケア学習会 in くまもと
- ・2025年12月14日(日) 令和7年度 こころの健康・文化フォーラム「子どもとともに自由と尊厳を届けあう人間力を考える」
- ・2026年1月11日(日) 兵庫県臨床心理士会 研修会「教育虐待と心理臨床」

学部学科	保健医療学部看護学科	氏名	山本真樹子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>2021年から奈良学園大学の保健医療学部の母性看護学・助産学領域に所属し、看護師と助産師養成に携わっている建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」ことを目指したカリキュラムが組まれており、更に奈良県下では唯一、大学の4年間の中で、看護師と助産師の国家試験受験資格取得に向けた教育を行っている。</p> <p>各種学生支援として、1年～4年のアドバイザー学生に前期後期および必要に応じて面談を行い、学業を含めた大学生活、進路相談などに応じた。オープンキャンパスを通して、アドバイザー以外の学生との交流を図り、進路や学業の相談支援を行った。地域住民の方との交流を目的の一つとする健康フェスティバルにおいて、学生の一つのロールモデルとなるように関わった。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>看護職者は、生涯学び続ける必要がある職種である。専門的な能力を維持し、高めていくためにも自ら専門的な知識や技術を身につける努力が求められる。同時に、高い倫理性が求められることと多様な背景の対象者と関わるため、幅広い教養と多角的な視点、多/他職種と一緒にチームの一員として役割を遂行する能力、自らを客観的に捉える能力が求められる。そして、何より、看護職者自身が心身ともに健康であることが前提となると考えている。様々な講義・演習・実習を通して、知識や学び方を学ぶだけでなく、自らを客観的にみる力、コミュニケーションスキル、自分の健康管理を行えるセルフケア能力を養えるようにと願っている。</p> <p>講義・演習を通して、自分の考えを発言し、他者の意見を聞くという機会、いつも一緒にいるメンバー以外のメンバーとグループとなって課題を一緒に行う機会とし、国家試験に頻出する内容について、講義・演習・実習を通して伝え、学習のモチベーションに繋げている。特に、実習の中で教科書に戻り、講義での知識をどのように臨床で生かすのかを一緒に振り返り、また学生相互に教え合う機会を作っている。基本的に、聖書の価値観を土台とし、一人ひとりの学生の成長を信頼することとその学生の背景も含めて理解すること、可能な限り、直接話をする場を設け、学生の意見を聞くことを大切にしたいと考えている。また、母性看護学・助産学が専門であることから、男女問わずに自らの心身を大事にすることを伝えることも心がけている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>・学生との接し方                  学生が主体的に学べる環境を整える。特に、学生たちが自分の意見を自由に語れる雰囲気づくりに努め、自分の発言に自信が持てるようにかかわった。</p> <p>・授業の工夫(授業の方法, 内容等); 地域母子保健では、学生自身の居住地の市の広報に掲載されている母子保健活動から学習を深めるようにした。まず、自分の住所がある地域での母子保健活動を知り、教科書で学ぶ法律や政策がどのような形で住民の生活に還元されているか、またどのようなニーズや課題があるかを学ぶ機会とし、さらに、助産学実習で関わる妊産婦が受けることができる社会資源・支援、また場所などを事前に知識として知り、生かせるように工夫した。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>・達成できたこと, できなかったこと(達成レベル)</p> <p>広報を見たことがなかった学生たちから、住んでいる地域でおこなわれている母子保健活動を知り、機会となり、実母と話す機会となっていたこと、その地域の特徴や課題を考える機会となっていたことから、地域母子保健の目標・概要である「母子保健の動向、課題、母子保健活動に活用できる法律や制度、地域で生活する母子や家族のニーズとその把握の方法について理解し、地域において母子保健活動を展開するための基礎的知識を習得し、地域母子保健活動における助産師の役割について考察する」を達成する一つの方法にはなっていた。</p> <p>しかし、知識としての定着したかどうかの成果を図る指標がないため、客観的達成できたかどうかは評価をいたため、今後は、客観的に評価できるように工夫していく。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			

・助産学実習や演習において、CLOCMiPレベルⅢ認証申請のための必須研修(日本看護協会インターネット配信研修)での学びを、振り返りやアセスメントに生かすことができていたので、今後もCLOCMiPレベルⅢ認証申請のための必須研修、助産師会、様々な学会での学びを講義・演習・実習に還元していく。全国助産師協議会のファーストステージ研修助産師教育課程を受講し、助産師教育の教育方法や評価方法について学び、今後の講義・演習・実習で生かす。

・短期的・長期的目標  
 短期目標:博士課程に進学し、博士号の取得を目指す  
 長期目標:助産師として地域に直接的に貢献できる方法を考え、実践する。

・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

資料 1

	科目名
学部専門 科目	母性看護援助論演習、母性看護学実習、統合看護実習、卒業研究Ⅱ
学部専門科 目(助産師 課程)	助産診断・技術学演習Ⅰ、助産診断・技術学演習Ⅱ、助産学概論、地域母子保健、助産学実習Ⅰ～Ⅳ

学部 学科	保健医療学部 看護学科	氏名	松浦 尚子
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1) 令和6年度、保健医療学部看護学科の基礎看護学領域で、以下の授業を担当した。            (1年次生) 看護技術の基礎Ⅰ、基礎看護学実習Ⅰ            (2年次生) 看護技術の基礎Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅰ、看護実践プロセスの基盤Ⅱ、基礎看護学実習            (4年次生) 卒業研究Ⅱ、統合看護論、統合看護学実習</p> <p>2) アドバイザーとして、1年次生4名、2年次生4名、3年次生3名、4年次生以上3名の学修や生活支援</p> <p>3) 校務分掌ではFD委員会、学生生活委員会を担当した。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>本学の教育活動において、学生が主体的な学習を行い、さらに対象者にとっての「より良い状態」とは何であるかという教育を目指している。そして、入学時から学生と関わる立場にあるため、学生の個々の能力を伸ばすような関わりを目指している。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>講義、演習では、一人の事例を通して、学ぶことで、日々変化する対象者の状況に合わせた「より良い状態」を伝える内容としている。対象者の状況は既習の学習内容から「なぜ？」と問いかけ根拠を考えさせるようにして、グループでのディスカッションの時間を設定し、様々な方向から対象者を捉え、「より良い状態」を伝える。考えたことを言語化することにより、考える力、相手に伝える力が育っていくため、毎回講義・演習の前の課題を出し、学びの言語化をしている。</p> <p>実習では、「なぜ？」と問いかけながらも、その時にしか学べないことが多々あるため、すぐに答えが導き出せず、工夫し、対象者の状態を捉え、看護をする楽しさを実感できるようにしている。このような関りが主体的な学修へと導いていけると考え実践している。</p> <p>さらに、主体的に看護技術を学ぶために、週に1回実習室の開放を行っている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>授業評価は概ね良好な評価であった。</p> <p>看護技術の基礎Ⅰでのまとめ演習では既習の知識、技術を活用して対象者の「より良い状態」を臨機応変に対応していた。しかし、学習した内容がすべて活用できている状況ではないため、繰り返し問いかけを行い、演習を行い、知識の定着ができるようにしていく必要がある。</p> <p>2年次生は臨地実習後、「次はもっと勉強して患者さんのために看護をしたい」という言葉を担当していた先生から聞くことが出来たことから、看護の楽しさを伝えることができたと考え一方、学生が学習不足を感じ、知識の定着の出来ていない部分が多々あり課題となった。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>短期目標</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 授業研究を行う時間を確保し、学生の学びが深まる授業にする。</li> <li>2) オムニバスでの授業のため、教員間の連携をさらに密にし、同じ方向性で学生を教育し、教育活動の実践学会誌に投稿する。</li> <li>3) 学生とのコミュニケーションから、学生を理解し能力向上への関りを行う。</li> </ol> <p>長期目標</p> <p>学生が将来にわたって主体的に学習していくために、私自身の専門性を深めると共に、広い視野を持ち教育を行う。</p>			
<p>・必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)</p>			

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	溝口みちる
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>私は現在、成人老年看護学領域に所属している。成人期から老年期までの幅広い発達段階である対象者が、さまざまな時期での健康障害と治療を行い、その時々に合わせて適切な看護ができるよう、教育を行っている。</p> <p>令和7年度は、以下の科目を担当し、科目の目的・目標に沿った授業・教育を行った。                  2年生：成人老年看護援助論Ⅰ、成人老年看護援助論Ⅱ                  3年生：成人老年看護援助論演習Ⅰ、成人看護援助論演習Ⅱ、成人老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ                  4年生：統合実習、卒業研究Ⅱ</p> <p>授業の担当は、2年次の成人老年看護援助論Ⅰおよび成人老年看護援助論Ⅱ、3年次の成人老年看護援助論演習を担当した。オムニバスで授業担当をしているため、他の担当教員の授業や学生の反応などを確認し、これまでの授業内容や資料を再確認することで、担当する授業のどの部分につながっているのかが理解でき、今後の復習にもつながる。また、学生には、対象者や家族の状態がその時々で状況で変化することがわかるように伝えることで、看護は切れ目なく続いているということを身に付けさせようとしている。</p> <p>実習では、3年次の成人老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを担当した。実際に受け持ちをする対象者を看護の視点で捉えるためには、どのようなことが必要か、考えられるように工夫し指導をしている。</p> <p>学生支援では、アドバイザーは、1年次生から4年次生を担当し、学生生活を送るうえでの支援を行っている。また、学生生活委員会に所属し、より良い学生生活づくりを目指した保証人懇談会の計画に関わったり、学生が安心して学生生活を送ることができるよう、教員と学生間での意見交換会を定期的に行うなどの取り組みを行った。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>学生一人ひとりの成長段階やレディネスを尊重し、主体的に課題解決へ取り組める力を育成することに重視している。看護専門職としての基盤を築くためには、理解度に応じた丁寧な指導と、学びを振り返る過程が不可欠である。そのため、教育活動を通じて学生の成長を見守りつつ、常に教育内容を改善し、学習環境の質向上に努めている。</p> <p>看護職を志すものとしての人間性や倫理観を備えた医療従事者の育成を目指している。対象者をひとりの人として捉え、健康が障害されてもその人らしく生活を送ることができるよう常に相手の立場に立ち考えることができる力を養いたい。そのためには学生が自ら感じ、考え、行動することへつながるようなプロセスを大事にしたい。学生生活のなかで、どれだけ成長できたかを実感できること、成功体験を積み重ねることができるよう、教育したいと考えている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>「人を支える人になる」という目標のもと、学生自ら行動できる力を育み、一人ひとりの挑戦を支援し、専門職としての確かな実践力を身につけることができるよう、取り組みをしている。</p> <p>1. 学生との接し方                  学生生活を送るうえで、さまざまな不安や悩みを抱えている学生が多い。まずは、学生の表情や言動から察知し、声をかけて話を聞くようにしている。些細なことでも真摯に向き合うが、学生自身の考えとその行動を重視し、サポートしている。時には、直ぐに考えがまとまらなかったり行動できないこともあるが、学生自身がどうしたいのかを一番大切にしたい。また、迷った時には道筋を伝えることもあり、学生のレディネスに合わせて関わっている。また、その時々で状況も変わると考えられるため、その都度、面談を行うようにしている。</p>			

## 2. 授業の工夫

### ①成人老年看護援助論

授業開始の1週間前に、授業内容と事前学習の周知を行っている。授業では、病態にどのようにつながっているか、また復習の意味も込めて、関連する人体の構造、疾病の成り立ちから開始している。そして、看護を実践するためには、病態だけでなく対象者の発達段階や生活背景も重要となり、対象者の身体面・精神面・社会面から考える力も必要となる。そのため、わかりやすい事例から問いかけ、反応を確認して状況が把握できていないようであれば、補填をしている。ペアワークやグループワークで考える時間を作り、最後にテキストや参考書から理論を提示し具体的に解説をしている。また、グループワークで考えたことを発表し解説を行っている。授業終了時には、授業の目標に沿って記載・提出をさせ理解度を確認している。

### ②成人老年看護援助論演習

実際の患者さんを想定し、症状、既往歴、家族構成、受診までの経過、診断から患者が想定できるような紙上事例として作成している。わからないところをまずは調べるといことから始める。紙上事例ではあるが、教員が事例対象者になりきり、学生が情報収集を行い、紙上事例の対象者を想定できるように工夫している。学生が自ら考え、ペアワーク、グループワークを通じて他の学生と自信の考えを共有し、討論できる力を養うことで、学生全員が授業に参加できる。また、事例をとおして一連の看護過程の展開を理解できるようにしている。演習授業であるため、実習室での授業を中心としている。周術期の対象者の事例をモデル人形で再現し、手術後の観察や看護を学ぶことができるよう、より臨床に近いリアルな形を工夫している。実際に学生が実施した後、各グループでリフレクションしながらホワイトボードへ記載させる。その後、発表させ最後に具合的な場面での援助や対応など、教員からフィードバックする。加えて、常に対象者の状況を判断できるような力も身につけることができるような助言もしている。

## 4. 教育の成果

- ・学生は自身の周囲に罹患している方を想定しており、「授業を受けたことで、より病態や看護への理解が深まった」という記述がみられた。
- ・ペアワーク、グループワーク、発表を取り入れ、「他の学生の色々な意見が聞けて勉強になった、状況に応じた看護をすることが大切で、正解はないということがわかった」という記述がみられた。
- ・一連の看護過程について、わからないことを表出できない学生がいる。この学生が「看護過程を理解できた」ということをどのように引き出すかが課題である。

## 5. 今後の目標

### 短期目標

- ・学生の想像を引き立て、考えることができるような授業内容の構築・工夫をする。
- ・より臨場感のある授業を計画し、一連の看護過程を理解できるよう展開することができる。

### 長期目標

- ・授業や実習を通しての体験や経験から、看護師を志すものとしての知識や人間性、倫理観について深めることができる。

- ・必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)

Webシラバス参照

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	村川 園美
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>&lt;担当授業科目&gt;</p> <p>(1年次生) ラーニングスキルズⅠ</p> <p>(2年次生) 小児看護援助論</p> <p>(3年次生) 小児看護援助論演習 小児看護学実習</p> <p>(4年次生) 統合看護学実習 卒業研究</p> <p>&lt;各種学生支援&gt;</p> <p>アドバイザーとして1年次生：1人、2年次生：4人、3年次生：4人、4年次生；2人を担当し、学習支援・就職支援・国家試験対策支援・相談業務・保護者面談等を行っている。</p>			
<b>2. 教育の理念・目的</b>			
<p>看護職は卒業後も生涯にわたって学び続けることが求められる専門職である。本学の教育理念である「心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材の養成」を念頭に置き、学生が学習へのモチベーションを保ち続けながら主体的に学べるよう支援している。具体的には、看護師として必要な知識・技術の習得に加え、学生が自身の考えや判断を言語化し、他者に伝える力を育むことを重視している。これらを通して、学生一人ひとりが自ら考え、判断し、実践できる看護職者へと成長することを目指して教育に取り組んでいる。</p> <p>小児看護を専門としているが、すべての学生が小児科で勤務する看護師になることを目指して教育に携わっているわけではない。しかし、少子化の進行により成人・小児混合病棟が増加している現在、看護師が意図せず子どもをケアする場面は今後さらに増えていくと考えている。そのような臨床の現実を踏まえ、学生には「子どもは大人の縮小版ではない」という視点を持ち、子どもには子どもに応じた看護があることを理解した上で、目の前の子どもにとってより良い看護とは何かを立ち止まって考えることができる力を身につけてほしいと考えている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>&lt;学生との接し方&gt;</p> <p>学生が安心して学び、自身の考えを表現できる学習環境を整えることを重視している。授業内での発表に対する心理的負担を軽減するため、明確な正解が一つに定まらない問いを学生に行い、学生一人ひとりの考えを尊重する姿勢を大切にしている。また、学生からの学習内容や進路に関する相談には積極的に応じ、学生が自身の考えや疑問を言語化できるよう支援している。</p> <p>&lt;授業の工夫&gt;</p> <p>学生が臨床現場を具体的にイメージしながら学習できるよう、手術を受ける子どもの術後環境やプレパレーションに用いられる実際のツールなど、臨床現場の写真を授業内で提示している。また、学生の興味・関心を高め、学習内容の理解と定着を図るため、授業テーマに即した自身の臨床経験を紹介し、必要に応じて国家試験問題を活用して学習内容の定着を図っている。さらに、学生の集中力を維持し主体的な学びを促すため、授業の途中にグループディスカッションの時間を設け、意見交換や発表の機会を取り入れている。授業中は、話すスピードや声量にも配慮し、学生が理解しやすい授業運営を心がけている。</p> <p>&lt;FD/SD活動等にかかわる内外の研修への参加&gt;</p> <p>今年度は学外のFD/SD研修に参加することができなかったが、教育の質向上を目的として、本学で実施されたFD/SD活動や教育に関する研修に参加し、授業方法や学生支援に関する知見の更新に努めている。これらの研修で得た知識や他教員との意見交換を通して得られた気づきを、自身の授業改善や学生との関わりに活かすことを意識している。</p> <p>&lt;自らの専門分野の成長&gt;</p> <p>臨床の動向や看護実践の変化に関心を持ち、専門分野に関する知識の更新に努めている。今年度は、研究成果を学会で発表するとともに、学会誌にも投稿しアクセプトされた。また、小児看護専門看護師として現在も臨床での活動時間を設け、実践の場で得られる経験や課題を通して、看護の質向上に向けた取り組みを継続している。これらの自身の研究成果や臨床経験、最新の知見を授業内容に反映させることで、学生が現場を意識しながら学習できるよう工夫している。</p>			

## 4. 教育の成果

授業終了後の匿名アンケート結果 (n=63)

### ①配布資料の見やすさ

大変良い：61.9% 良い：34.9% 普通：2% 悪い：0% 大変悪い：0%

### ②授業のスピード

大変速い：3.2% やや速い：46% ちょうど良い：49.2% やや遅い：1.6% 大変遅い：0%

### ③授業のわかりやすさ

大変わかりやすい：69.8% ややわかりやすい：25.4% 普通：4.8% ややわかりにくい：0% 大変わかりにくい：0%

### ④その他 (自由記述)

- ・スライドをめくるスピードが速い時があるため、ゆっくりにしてほしい
- ・スライドの内容を記入している途中で次へ進む時があるため、もう少しゆっくりだと嬉しいです。
- ・資料や説明がとてもわかりやすいし、事例を使って実際に考えてみる時間がある事が理解に繋がりました。とても楽しく授業を受けることが出来ました。
- ・先生の授業は凄く分かりやすく、丁寧で声も落ち着いていて過去の自身の事例も語ってくださるので良い。

## 5. 今後の目標

### <短期目標>

学生が主体的に学び、思考・判断を言語化できる力を育むために、授業および演習方法の改善に継続的に取り組む。具体的には、小児看護の授業において、事例検討やグループディスカッションを通して、学生が「なぜその看護が必要なのか」「その子どもにとって最善とは何か」を自ら考え、他者と共有できる学習活動を充実させる。また、学生一人ひとりの理解度や学習意欲に配慮したフィードバックを意識的に行い、学習へのモチベーションを維持・向上できる支援を実践する。これらを通して、学生が子どもを「大人の縮小版」としてではなく、発達段階や生活背景を踏まえて捉える視点を確実に身につけられるよう教育内容の精選と工夫を行う。

### <長期目標>

小児看護を専門とする教員として、最新の看護学・医療の動向を継続的に学び、教育内容を常にアップデートしながら、看護基礎教育の質向上に主体的に貢献できる教育者となることを目標とする。また、自身の教育実践を省察し、その成果を学内外で共有するとともに、若手教員への教育的支援やカリキュラム改善にも関与する

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)

なし

## 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	浅野千晶
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>1. 保健医療学部看護学科成人老年看護学領域で、以下の授業を担当した(成人老年看護援助論はこのうちの数回の授業を担当した)。            (2年次生)成人老年看護援助論Ⅰ            (3年次生)成人老年看護援助論演習Ⅰ,Ⅱ、成人老年看護学実習Ⅰ～Ⅳ            (4年次生)統合看護学実習、卒業研究Ⅱ            2. アドバイザーとして1年次生～4年次生を担当した。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>本学の建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献」できることを目指して教育に携わっている。            学生らが本学科のディプロマポリシーに掲げる力をもてるような関わりや支援を常に意識しておくようにしている。            特に看護職者は生涯にわたって学習が必要であり、与えられてではなく自律的に学習を続けられることが求められる。また多様性に富む人々や、変化し続ける社会に柔軟に対応できる力も必要である。自律性を高め、また社会や人々に柔軟に対応できる人を育てられるように心がけたい。医療はますます高度化し、生命倫理や看護倫理にかかわる問題も孕みやすい状況であり、それらの問題に気付けるような高い倫理観をもてるように学生らの意識づけとなるような関わりも教員には必要であると考えている。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>・学生との接し方            学生の話をよく聴くようにしている。また答えを与えるのではなく、学生が考えて答えへと導けるような声かけを心がけている。また正しい、間違っているという判断が重要なのではなく、どのように考えたのかという思考過程を大切にしたいと考える。            ・授業の工夫(授業の方法、内容等)            学生が興味をもてるように、イメージしやすいように、長い臨床経験を活かした説明や例を挙げて説明するようにしている。            相手を慮ることができるように、「自身や自身の家族だったらどう思うか、感じるか」と考えてみるように促している。            実習では、これまで得た知識を目の前の現象と結び付けられるように導き、学生が納得できたり、面白いと感じたりできるように働きかけている。</p>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<p>実習中の学生カンファレンスでは、「他者の意見を聞くこと、自身の意見を伝えること」ができるようになってきていると感じている。            学生へ説明する際に専門的すぎる内容になる場合があり、気をつけなければいけないところである。            学生に求めすぎない姿勢(学生の段階であり臨床での知識・技術を求めているのではなく、DPを達成できること)が必要だと思っている。</p>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<p>教員としての経験が浅いので、日々の研鑽を重ねたい。効果的な授業計画や資料作成、説明等について学んでいきたい。            学生らとの相互作用で自身も成長できるように努めたい。</p>			
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)</p>			

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	趙 聖櫻
<b>1. 教育の責任</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が相談をしやすい環境を作る</li> <li>・学生に対してできるだけ身近に、学生にとって親しみやすいよう接する</li> <li>・学生本人の思いや意見を大切にする</li> </ul>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>学生が自らの意志で積極的に授業に参加し、より有意義な学生生活を送ることができるよう支援する。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義内の工夫として、学生同士のグループワークを積極的に行うことで学びを深めることができる。</li> <li>・学生が自らの意見を発表しやすいように巡回や質問の時間を作り、また休憩時間などでも声掛けを行う。</li> </ul>			
<b>4. 教育の成果</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的に講義を行っている回数が少ないが、授業アンケートや学生での意見では講義に参加しやすく質問もしやすいという意見をいただいた。</li> <li>・一方でグループワークが多いことから放任的だとする声が1度だけ見られ、どのような目的でグループワークを行うのか、講義を行っているのかを説明することで以降の授業アンケートでそのような意見は見られなくなった。</li> </ul>			
<b>5. 今後の目標</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らが主体的に講義を進められるように経験を重ねていきたい</li> <li>・実習指導でも学生に質問しやすい環境を心がけているが、自分に自信がなかったり、質問しても良いか迷う学生もいるため、そのような学生のヘルプに気づいて挙げられるようになりたいと考える</li> </ul>			
<b>・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス, 授業評価アンケート等)</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・広報委員会に置いてオープンキャンパスに参加し、様々な学生との交流を深める。一度顔を見たことがあったり、話したことがある学生だと学生も教員のことを認識し、話しやすくなると考え、自身の接し方や目標達成に一歩近づくことができると思われる。</li> </ul>			

# 奈良学園大学ティーチングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	森本 早紀
<b>1. 教育の責任</b>			
<p>本学の看護学科では、人と社会に貢献できる看護師の養成を目的として、看護師国家試験受験資格に向けた教育を行っている。その中でも私は主に1～2年生を対象とした基礎看護学科目を担当し、看護学の基礎的な考え方ならびに知識・技術の修得を目的とした講義・演習・実習から成る教育に関わっている。さらに、4年次の担当科目においては、社会の要請に応えうる看護職者の育成を目指した教育を担っている。</p> <p>令和6年度担当授業科目            (1年次) 看護技術の基礎Ⅰ(療養支援) 基礎看護学実習Ⅰ            (2年次) 看護技術の基礎Ⅱ(診療・治療支援) 基礎看護学実習Ⅱ            看護実践プロセスの基盤Ⅰ(情報の評価と課題発見) 看護実践プロセスの基盤Ⅱ            (4年次) 卒業研究 統合看護実習 統合看護論</p> <p>&lt;学習支援&gt;            学生アドバイザーとして1年生5人、2年生4人、3年生2人、4年生2人を担当しており、学習生活支援を行っている。            学生生活委員として学生生活に関わる支援を行っている。特に2年次生の学年担当アドバイザーとしてとして学生と関わっている。</p>			
<b>2. 教育の理念</b>			
<p>本学看護学科の教育は、医療の対象となる人々の多様な価値観や背景を尊重し、個々の状況に応じた看護を実践できる人材の育成を理念とする。そのために、根拠に基づいた思考力を養うとともに、主体的に学び続ける姿勢と、自ら課題を見出し自律的に行動できる人材の育成を目指す。国家資格の取得にとどまらず、現代社会において求められる汎用的能力を身に着けることを重視する。</p> <p>以上の理念を実現するために教育目的として以下の点を設定する。</p> <p>①学生が学習に対して主体的な動機付けや関心を持ち、看護学および関連分野について自主的に学習する姿勢を形成する。            臨床現場で活用可能であり、社会においても通用するような汎用能力を育成するためには学生自身が主体的に取り組む姿勢を身に着けることが重要である。</p> <p>②学生が自身の考えを言語化し他者と共有し対話する力を身に着ける。            多職種との協働しながら看護を実践していくためには、自身の考えを他者に伝え、共有し、対話を通して発展的な思考へとつなげていく力が求められる。</p> <p>③単一的な視点にとらわれず、想像力を持って多様な価値観や視点、考え方を理解し受け入れ、育む力を育成する。            看護に重要な他者理解を実践するためには、固定概念にとらわれず様々な価値観や考え方を理解する力が必要である。</p> <p>④講義・演習・実習を通して臨床現場で活用可能な知識および技術を修得する。            単に方法や手段を習得するのではなく、基本的な知識に基づいた根拠ある判断と実践力を身に着けることを重視する。</p>			
<b>3. 教育の方法</b>			
<p>上述した教育の目的を達成するために、私は学生には対象となる人々を理解し、様々な視点から自ら考える力を身につけられるような関わりを重視している。学生が自身の考えを自らの言葉で表現することを促し、学生自身が自律した思考と行動を培えるような支援を心がけている。また、授業においては学生と共に考える姿勢を大切に、教員からの一方向な知識伝達にとどまらず、学生と教員の双方向での意見交換やディスカッションが行える関わりを積極的に取り入れている。</p> <p>学生への問いかけや演習課題では、単一の正解を導き出すことを目的とするのではなく、多様な考え方や視点を持ち、それらを検討することができるよう工夫している。実習においては、臨床現場から学生自身が感じ、考えたことを言語化し他者と共有できるように働きかけている。「なぜそう考えたのか」「その考えに至るまでの過程は何か」といった問いかけを丁寧に投げかけることで、学生自身が思考を整理し、根拠に基づいて判断できるよう支援している。また、自身の看護師としての臨床経験を踏まえた説明や言葉かけを行うことで、大学での学びと臨床現場の実践とを結びつけることを意識している。</p>			

#### 4. 教育の成果

授業後に学生から提出された学習の振り返りからは、授業で設定した学習目標の達成に向けた理解や学びの深まりが確認できる。主体的な学習の成果がうかがえる内容も多くみられた。授業中のグループワークにおいては、積極的な質問や意見交換が行われている、学びを相互に深める姿勢がみられる。また、解剖生理学や薬理学などの教科書や授業ノートを参照しながら受講する様子もみられ、既習科目で得た知識を活用しながら考えようとする姿勢が確認されている。

実習においては、初日から最終日にかけて、学生の思考過程や実践内容における成長が認められている。対象者を中心にした臨床現場での経験を通じて、座学で得た学びと実践を結びつけながら理解を深めている。さらに、学生同士によるカンファレンスでは学生自身の考えを言語化し、他の学生と共有することで、学びを発展させる場面もみられている。

#### 5. 今後の目標

##### <短期目標>

学生の学びに対する動機付けや関心を高めることができる授業形態の構築を目指す。具体的には、学生自ら「知りたい」「学びたい」と感じ、看護への関心を主体的に深めていけるような授業構成や学修支援の工夫を行う。学生の理解度や反応を踏まえた問いかけを行い、能動的な参加を促すことを重視する。また、日々の教育実践や学生アンケートなどから得られるフィードバックを振り返り、授業内容や指導方法の改善につなげる、学生の状況に即した教育の実現を目指す。

##### <長期目標>

教育活動を通して得た経験を蓄積し、自分の教育理念に基づいた授業設計および指導方法の確立を目標とする。学生の主体性や思考力を育成する教育を実践しながら、教育の質向上に寄与することを目指す。さらに、科研費の獲得を目指して研究活動に取り組み、得られて研究成果を教育活動にも還元することで、教育と研究の相互発展を図る。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

なし